

歯学部ニュース

平成29年度第2号（通算132号）

特集 歯学部卒業おめでとう
活動の場を海外に広げて



卒業を祝して

歯学部長 前 田 健 康

歯学科第48期生の皆さん、口腔生命福祉学科第11期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、今日の日を一日千秋の思いで待ち焦がれていたご家族、保護者の皆様方のご尽力にも敬意を表するとともに、お喜び申し上げます。

卒業生の皆さんは、新潟大学歯学部教育課程をすべて修了し、学士の称号を与えられて、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、福祉職、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

新潟大学歯学部設置時に比べ、現在の歯科界を取り巻く状況は大きく変わりました。歯学部設置当時（1965年）は歯科医師不足とむし歯の洪水で、地域歯科医療に貢献できる人材養成が急務でした。現在、我が国は超高齢社会を迎え、平成25（2013）年にはそれぞれ80.50歳、86.83歳（高齢化率は25.1% [男性22.1%、女性27.8%]）となり、平成72年（2060）年には39.9%に達し、2.5人に1人が65歳以上になるとの推計が出されています。今までの歯科医療も健康者型から高齢者型へ大きく転換することが求められていますが、「口腔や食べるといったQOLの向上の観点から、すべての人の健康と質の高い生活を実現する」という歯科医療が目指すところに変わりはありません。このような中、平成28年度には、文部科学省では歯学教育モデル・コア・カリキュラム、厚生労働省

では歯科医師国家試験出題基準の改訂が行われました。

かつて、「人生50年」という言葉がありました。この「人生50年」とは幸若舞いの「敦盛」の中の一節で、織田信長が桶狭間の戦いの出陣前に謡いながら舞ったことで有名な一節ですが、現在では「人生100年」がキーワードになってきています。100歳以上の人をセンテナリアン（centenarian）と呼びますが、日本では現在60,000人を超え、その数は短期間のうちに急増することが予想され、2007年生まれの半分以上が107歳以上生きるとされています。このため、政府は「人生100年時代構想会議」を立ち上げ、人生100年時代（百寿社会）を見据えた経済・社会システムを実現するための政策のグランドデザインに係る検討を開始しました。2017年のビジネス書グランプリを獲得したリンダ グラットン、アンドリュー スコットの著作「Life Shift ～100年時代の人生戦略」では、これまでの教育（22歳まで）、仕事（65歳まで）、老後（84歳まで）の3ステージが、これからは教育（22歳まで）、マルチステージ（80歳まで）、老後（100歳まで）のとなり、このマルチステージを生きるにはお金以外の無形の資産が必要で、その中に、活力資産（健康）が必要になってくると述べられています。

超高齢社会の中、国は歯学に対し、健康長寿社会実現への貢献、医療イノベーションの創出、国際的な医療課題の解決を期待しています。しかし、社会は口腔医療・保健・福祉のプロフェッショナルとなる皆さんに対して、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。

また、社会は専門的知識やスキルを維持・向上させる責任も求めるため、皆さんにはさらに一層の常日頃の精進が不可欠となります。皆さんが社会から認められるためには、今日この日に、改めてこれからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。そして、新潟大学歯学部を卒業したという自負をもって、社会のリーダーとして活躍することを期待いたします。「優れたリーダーとは、優秀は才能によって人々を率いて行くだけの人間だけではない。率いられていく人々に、自分たちがいなくては、と思わせることに成功した人である」（塩野七生：ローマ人の物語 第Ⅱ巻 ハンニバル戦記）とされています。

是非、変革が進む歯科界のリーダーとして活躍して下さい。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、我々教職員一同はこれからも熱意を持って、応援していきたいと思います。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部は競争が激化している歯科界の中で、高い評価を受けています。すばらしい教育資源を有しています。我々教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待しています。





歯学部卒業おめでとう

医歯学総合病院 副病院長 小 林 正 治（歯科担当）

歯学科第48期生ならびに口腔生命福祉学科第11期生の皆さん、卒業誠におめでとうございます。歯学部での課程をすべて修了され、晴れて学士の学位を授与されました。これまでの努力とその成果を讃えますとともに、光り輝く未来に対して心から祝福を申し上げます。また、ここに至るまでの長い年月、皆さんの勉学を支えてこられたご家族の皆様方のご労苦に対し、敬意と感謝の意を表します。

皆さんは、厳しい受験戦争を勝ち抜いて本学に入学した時のことを覚えていますでしょうか。その時、自分の将来に対して皆さんはどんな夢を抱いていたでしょうか。その夢は、大学生活で得た知識や経験で変わったのでしょうか。そして、皆さんがこれから歩いていこうとされる道は、その夢とどう繋がっているのでしょうか。皆さんは今、新たな人生のステージに向かってスタートの場に立ち、緊張感に包まれていることと思います。10年後20年後に、自分自身がどうありたいかをイメージしてください。そうなるために、何をしなければならないかを考えてください。思うようにいかないのも人生ではありますが、自分で自分の人生を設計することも重要です。

歯学科では、これからの歯学界をリードする人材を育成することを目的として様々な教育を行ってきましたが、医療の進歩は日進月歩です。皆さんがこれまでに得た知識や技術はあくまでも歯科

医師としての基礎であります。歯科医師として大きく育つためには、皆さん自身で基礎の上に何を積み重ねていくかが勝負となります。また、口腔生命福祉学科では、高度な歯科専門知識を有しつつ、保健・医療・福祉を総合的に思考・マネジメントできる人材の養成を目的として教育を行ってきました。皆さんはこれから歯科衛生士あるいは社会福祉士として医療や社会福祉の現場に立つこととなります。地域包括ケア体制の構築が急務となるなかで、皆さんには広い視野と豊富な知識や高いスキルがますます求められており、プロフェッショナルとして多職種の緊密な連携による口腔機能の維持向上を実現していくことが期待されています。

皆さんがこれから船出をする海は決して平穏なものではなく、まさに荒海です。歯科医療の対象は健常者から高齢者・有病者へと多様化が進み、歯科医療のIT化も加速しています。皆さんが自分自身で素晴らしい未来を切り開くためにも、明確な目標を設定し、広い視野を持って、知的好奇心を失うことなく、忍耐強く考え続ける力を基に、一歩一歩努力を重ねていただきたいと思います。

新潟大学歯学部ならびに医歯学総合病院歯科診療部門は、これから様々な分野で活躍する皆さんを全面的に支援します。また、卒業される皆さんも母校を末永く支援していただきますよう心より願っています。

卒業にあたり

歯学科6年 善 本 佑

歯学部に入塾して、気がつけば4年が経ちました。

あれだけ1日1日が長く感じた臨床実習や国家試験の勉強も、終わってみれば全てがあっという間の出来事でした。

思い起こせば、一度は編入試験に不合格だった自分が、補欠要員として入学させてもらい、こうして卒業にあたって寄稿する文章に頭を悩ませることができるのも、新潟大学歯学部との浅からぬ縁があったのだと感じずにはいられません。ただ、本当に自分が幸運だったのは、単にモラトリウムが延長されたことでなく、この4年間を編入生の同期や48期生と共に過ごすことができたことでした。

3年生の解剖実習に始まり、テスト勉強やポリクリ、そして臨床実習に至るまで、一人で出来ることは何一つありませんでした。特に、臨床実習では、一人一人が自分の診療やレポートに追われる中で、しっかりとクラス全体でお互いを支え合い、共に励ましあうことで終了を迎えることがで

きました。

新潟大学では、臨床実習において、学生が実際の診療を通して技術や知識を得ることや、患者さんとのコミュニケーション能力を育む機会が他のどの大学よりも豊富にあることは間違いありません。そして、それを可能にしている要因の一つが、お互いをフォローしあえる仲間だったのだということに改めて感じます。

これから歯科医師としてのスタートを切るにあたって、実習の時とは比べものにならないほどの責任感と喜びを感じています。その上で、より様々な職種の方との連携の上で、患者さんやその家族に貢献することが求められていくことと思います。辛くなったり、壁に当たったりすること何度となくあるでしょう。その度に、この4年間が困難を乗り越える心の支えになることと信じて、今の気持ちを忘れず日々スキルアップしていけるよう努力していきたいと思います。

最後に、部活動の先輩や後輩。丁寧な指導をしていただいた先生方。臨床実習で協力していただいた患者さん。物心両面で支えてくれた家族。ここでは書ききれないほどの多くの方に支えられて卒業を迎えることができました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。



卒業にあたり

歯学科6年 熊田 茉彩

この歯学部ニュースの原稿を執筆するにあたり、自分の6年間を振り返り、何を書こうかと向き合うこと数十分。一番印象に残っているのは数々の実習なのですが、それについて書くと少々ネガティブな文章になってしまうと思うので、6年間の試験勉強の思い出について書きたいと思います。

1年生では教養科目ばかりでしたが、2年生からは旭町キャンパスに移り、専門的な科目を主に勉強していくことになりました。頑張らなければという気持ちが強く、思えば、初めての専門科目の試験前である2年生の夏休みは大学受験の夏休みよりも勉強していたと思います。しかし夏休み後、しばらく謎の頭痛と発熱に悩まされたのです。おかしいと思いながらもそのまま解剖のテストを受けましたが、その後病院で髄膜炎と診断され、入院することになったのは苦い思い出です。

そうしてコツコツと座学から実習までなんとかクリアし、いよいよ国家試験。私は国家試験の勉強

はずっと自宅でした。私にとって最も集中できる環境は自宅でしたし、時間をかけて大学に行くのも効率が悪いと感じたからです。しかし自宅だとどうしても勉強時間など日によってムラがあるので、大学の近くにいるなら、大学に行き決まった時間に勉強し、周囲の友人といろいろな話し合った方がいいのだろうなあと思います。結局は人によって環境もやり方も性格も違うので、いかに自分が集中できる環境を見つけ、勉強を続けられるかということが大事なのだと思います。また一人で勉強しているため不安になるときもありましたが、私の場合、家族との会話や愛猫、愛犬によるアニマルセラピーで精神を保っていました。ペットの写真であれ友人との会話であれ、不安になったり、集中が途切れたりしたときの気分転換がなにかあることは長い試験勉強生活においてとても重要な事だと痛感しました。

最後に6年間関わってくださった先生方、様々なご心配やご迷惑をおかけしましたが、ご指導いただけたおかげでこうして無事卒業をすることができました。本当にありがとうございました。今後は6年間歯学部で学んだことを生かして、立派な歯科医師になれるように頑張っていきたいと思っています。



卒業にあたり

歯学科6年 山中 秀 敏

入学した当初は長いと思っていた6年間も無事終わり、卒業を迎える今ほっとしたような寂しいような気持ちです。振り返ってみると様々な事があった6年間ですが、その中でも特に印象に残っている部活動と5年生10月からの臨床実習の事について記したいと思います。

一つ目は自分が所属していた弓道部についてです。部活では弓道はもちろんの事、試合後には他大学の人や新潟大学の他学科の人達と交流する事も多く、大学生らしい思い出をたくさん作ることが出来ました。また6年間を通して多くの人と関わる事で多様な価値観を知ることができ、今の自分を形作るものとして非常に価値ある経験が出来たように思います。先輩後輩、OB・OGの先生方との繋がりもでき、自分にとって大きな財産となりました。卒業後もこれらの繋がりを大事にしていければいいなと思っています。一方で楽しい事ばかりともいきませんでした。他人への共感、周囲への気配り等、「人の振り見て我が振り直せ」といった感じでお互いを高めつつ、人として成長する上で様々な事を経験出来たと思うのでこの経験を社会に出てからも活かしていければと思います。

二つ目は臨床実習についてです。臨床実習で経験出来たことは非常に多く、先生方には歯科治療に関する事から、患者さんに対する配慮、歯科医師としての心構えなど多くの事を教えて頂きました。

自分は不器用な部類だったのですが、それでも患者さんは優しく協力して下さい、先生方には見捨てず見守って頂き、時にはアドバイスを下さり、それに少しでも応えようと自分も最後まで頑張ってくれました。最後に患者さんに「ずっとあなたに診てもらいたいわ」と笑って言われた時には感動とある種の達成感で胸がいっぱいになりました。この時に頑張ってきて良かったなと思ったと同時に、将来目指したい歯科医師像が初めて浮かんだような気がしました。

あっという間の6年間でしたが多くの人に出会い、支えられ、刺激をもらいとても充実した学生生活を送ることが出来ました。こんな自分に根気強く関わって下さった先生方や先輩後輩、周りの友人には感謝してもしきれません。今後は新潟大学歯学部で学んだ事を活かして、しっかり患者さんと向き合っていける歯科医師になれるよう精進していきたいと思っています。本当にありがとうございました。



卒業生の言葉

口腔生命福祉学科4年 高橋 小雪

4年前の入学式。新しく始まる大学生活へ様々な期待をしながらも不安でいっぱいだったことを今でもよく覚えています。「卒業なんてまだ先の話」と思っていた私ですが、あっという間に4年が過ぎ、もう卒業を迎えようとしています。

大学生生活を振り返ってみると、特に印象に残っているのは4年生の臨床実習です。「口腔は学年が上がるにつれてどんどん忙しくなる」という言葉をよく耳にしましたが本当にその通りで、臨床実習が始まってからの毎日は「実習に行く診療科の業務について予習し、実習に出て、学んだことを整理して次の日の実習に備える」ことの繰り返しで、他のことになかなか手が回らないほど忙しい日々が続きました。実習では思うように動けずに悩むこともたくさんありましたが、その分できなかったことができるようになった時の達成感は大きく、やりがいを感じました。

また、私は歯学部弓道部に所属していました。最初は「何か新しいことにチャレンジしたい」という動機だけで入部をした弓道部。大学生になる前は文化部を貫いてきた私にとって、日々の練習や大会、合宿のすべてが新鮮なものでした。正直な所、現役部員として過ごした2年半の間で、胸

を張って自慢できるような成績を多く残すことはできませんでした。デンタルでは体調を崩し多くの方に迷惑をかけました。自分の不甲斐なさにも何度も悩みました。それでもやめずに続けて来られたのは、それ以上に弓道部の一員として過ごす時間がとても楽しく、そして先輩、同期、後輩の皆に支えられていたからだと思います。おかげで私はとても充実した時間を過ごすことができました。

最後になりますが、今まで関わってきた多くの方の支えのおかげで、今の私があります。皆さんには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これから社会に出ていくにあたり不安は沢山ありますが、頑張っていきたいと思います。本当にありがとうございました。



著者：左

卒業生の言葉

口腔生命福祉学科4年 小川 遥 香

「この学科は学年が上がるほど忙しくなる。」入学早々こんな言葉を聞き、4年間自分はちゃんとやっていけるのか不安になったのを今でもはっきり覚えています。実際、4年間で振り返ってみて確かにそうだったなと実感しています。1番忙しかった4年次は、3日間のオリエンテーションを経て始まった病院実習、それと同時進行で始まった特論、その合間に福祉実習をし、就活をし、12月になってやっと全てから解放されたと思ったら、社会福祉士と歯科衛生士の国家試験へ向けて受験勉強が始まり、とてもめまぐるしい一年でした。

しかし、私がこのハードなカリキュラムを乗り越えることができたのは部活があったおかげだと思っています。私は歯学部バドミントン部に所属していますが、私は部活が大好きなことで、4年次のデンタルに出ることをダブルスのペアと約束していたので、私は部活に行こうという強い気持ちがありました。そのおかげで辛い病院実習や特論を乗り越えることができ、私の大学生活はとても充実したものになりました。

先ほど病院実習は辛かったと書きましたが、実際に臨床現場にでることで、いかに自分が未熟であるかを思い知ったことや、患者さん相手に診療

補助やPMTGをやらせていただけたことは私にとって大変よい経験になりました。病院実習ではたくさんの先生や歯科衛生士の皆さんにご指導していただきましたが、その中で、私はある歯科衛生士さんとの出会い強い憧れを抱くようになりました。その方は、いつも明るく笑顔で周りの人まで笑顔にしてしまうような人柄ですが、いざという時にはとても頼りになる存在です。歯科衛生士としてまだまだ未熟な私ですが、4年間大学で学んだ知識と経験を生かし、私もその歯科衛生士さんのようになれるよう努力していきたいと思います。

最後に、お世話になった先生方、口腔生命福祉学科のみんな、歯学部バドミントン部の皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございました。



著者：右

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

歯周診断・再建学分野 佐藤圭祐

国語の授業で孔子の論語を学んだ記憶がある。その中の一節で、「子曰く、学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し。」という言葉を紹介したい。「物事を学ぶだけで自分の頭で考えなければ身にはつかない。逆に、自分で考えるだけで学ぶことをしないと考えが凝り固まって危険だ。」という解釈だったと思う。インターネットを活用し多くの情報が簡単に手にはいる昨今、自分の中に情報を素通りさせ「わかったつもり」になりがちだと感じる。しかしそんな時代だからこそ、「人や教科書から学ぶ」ことに加えて「自ら考える」ことが求められていると思う。なぜなら、実際の臨床（もちろん研究においても）では教科書通りにいかないことが多いからだ。私にとって大学院はその事を学ぶ場であったと思う。

研究とは無縁の学生生活を送ってきた私は、この4年間で研究について一から学ばせていただいた。私の研究テーマは「歯周炎と全身疾患の関連」、その中でも特に歯周炎と関節リウマチの関連メカニズムを腸内細菌叢の変動と腸管免疫応答の変化に注目し解析をおこなってきた。研究を通じて得たものはたくさんある。学会発表を通じて

国内外多くの場所を訪れることができ、多くの仲間ができたと思う。また、臨床を行う上でも研究の考え方が活きていると感じる。歯科治療もやはり学問なのだろう。論語には「子曰わく、これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」という言葉もある。楽しむことができれば、それが困難を乗り越えて物事を継続させる原動力になるように感じる。そう考えると、臨床も研究も意外と好きかもしれないという自分を見つけることができたことが、大学院生活での最も大きな収穫かもしれない。

最後になるが、ご指導を頂いた山崎和久教授、吉江弘正教授をはじめ歯周診断・再建学分野の先生方ならびに共同研究者の先生方にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



歯周診断・再建学分野の同期と（筆者：後列右）

大学院修了にあたって

歯学教育研究開発学分野 中 村 太

Aコースの歯科研修医として歯科総合診療部に勤務していた際、藤井先生にお声かけ頂き、分野として新しくできた歯学教育研究開発学分野の大学院生として入学してからはや4年。学部生時代は自分が大学院に進学するとは全く考えてもみなかったのですが、気が付けば30歳になるまで学生として新潟大学に在籍することとなりました。大学院生活を振り返ってみますと、いろいろなことがありましたが長いようで短い4年間でした。

大学院生としての生活といえはやはり研究ですが、私は光学式3次元動作解析装置、所謂モーションキャプチャーカメラを利用した診療動作解析をメインに研究をさせて頂きました。実験当初は初めて見る実験器具や見慣れぬ数字の羅列に頭が痛くなる思いでしたが、このような恵まれた環境で研究できる機会は今だけだと思い、実際に計測・解析を始めると非常に興味深いものでした。現在はまだ研究の途中ですが、将来的に自分の研究成果が大学の歯科臨床教育に役立つよう、今後も研究を続けていきたいと思います。

また、研究の成果を発表するということで、学会や研究に際し、様々な土地を訪れました。香港や九州等、今までの自分の生活では決して訪れないような土地に旅し、その土地の文化に触れる機会に恵まれたことは、大学院生の特権だと思います。私は非常にアルコールに弱く、行く先々で地酒を楽しむといったことはなく、ただひたすらにご当地グルメを食していました。香港での本場の中華料理から、長野でさざ虫までいろいろなものを食べましたが、どれも美味しく（さざ虫はそうでもなかったですが）、

機会があれば再び訪れたいなと感じるものでした。

研究の合間は臨床に明け暮れました。指導医である藤井先生が補綴の指導医である関係もあり、補綴を中心に歯科総合診療部にて一般歯科診療を日々行い、患者さんのニーズに沿った治療を学びました。この経験は自分の診療の幅を広げる大きな助けになったと考えています。

歯学教育研究開発学分野と歯科総合診療部に在籍し4年間大学院生として生活してきましたが、その間に学会の主催や歯科臨床研修の実施に携わることができ、非常に有意義な4年間でした。現在学部所属している学生さんの中には、大学院にはいかず開業医にてすぐに働きたいという人もたくさんいると思います。開業医でしか学べないことも多いかと思いますが、少し大学院にも目を向けてみてはどうでしょうか。大学院に進学することで苦労することもあると思いますが、その経験が今後の歯科医師としての在り方に幅を持たせてくれるかもしれません。私も大学院生活で得た経験を基に、今後も歯科医師として社会に貢献できるよう努めていく所存です。



同僚の送迎会にて、筆者は左

大学院修了にあたり

歯科矯正学分野 中 田 樹 里

大学院に入学したのは2014年4月のことでした。書類で「修了見込み2018年3月」を見かけた際には、まだまだ先のことだなんて考えていましたが、あっという間に卒業です。私は本学歯学部卒業後、総合診療部に一年間臨床研修を行い、歯科矯正学分野の大学院へ進学しました。

矯正の勉強がしたい！という思いで進学を決心しましたが、矯正の基本は何と言ってもセファログラムのトレースと模型作り、ワイヤー曲げです。学生時代より技工が苦手でしたが、正直大学院でこんなに技工物に苦しむことになるとは想像していませんでした。よく深夜泣きそうになりながら技工をしていたことは、今となっては良き思い出であり、何事も練習だということを学べた4年間でした。今後も一人前の矯正歯科医を目指して精進して参りたいと思います。

大学院の研究では歯科薬理学分野でお世話になり、「骨代謝」をテーマとしました。全身の骨組織は破骨細胞と骨芽細胞が常に均衡を保ちながら働いており、絶えずリモデリングが行われています。矯正歯科治療時においても両細胞の働きが必

要不可欠であり、薬剤添加により骨代謝が促進されれば、効率的な歯の移動に応用することが期待できます。大学院の研究では、いくつかの有効な薬剤を見つけることができ、今後はその働きの詳細なメカニズムについて解析を進める予定です。実験の手技や骨に関する知識など、一から学ぶことばかりでしたが、いつも丁寧にご指導をくださった先生方には大変感謝しております。

こうして無事に大学院を修了できますことは、歯科矯正学分野、歯科薬理学分野の先生方、同期、後輩のおかげです。改めて心より御礼を申し上げます。臨床では努力を継続すること、研究では好奇心を忘れずに新たな発見を目指すこと、この4年間学んだことを糧として今後も精進して参りたいと思います。



大学院修了にあたり

口腔生命福祉学専攻博士前期課程 高 橋 駿 介

時がたつのは早く、二年間の大学院での生活も終わりが近づいていると実感しています。今回の執筆の機会を機に、これまでの大学院での生活を学んだことを振り返ってみたいと思います。

まず、2年間では自らの専門性を身に着けることができたと思います。私の研究は「高齢者の生活習慣について聴取し、要支援・要介護高齢者の中で比較検討を行う」といったものでありました。私自身、福祉の中でも高齢者福祉について興味関心があったため、そうした自ら興味のある分野について学びを深めることができたことはとても良かったことであると思っています。また、学内講義を受け、数々の学会に参加することで、幅広い知識を身に着けることができたと思っています。

もちろん、大学院での勉学により多くの知識を学ぶことができました。しかし、何より学んだことは“忍耐力”“継続力”ということでもあります。私自身、これまでの勉学の中で、自分で計画し、見立てをもって継続して取り組むといった経験はありませんでした。正直なところ、研究に行き詰

まり、時折多少の辛さを実感することはありました。それでも、自分で決めた目標に向けて努力する大学院での勉学を経験することで忍耐強く取り組むことの重要性を実感することができました。もちろん、これらのことは基本的なことだと思います。しかし、これからの人生において最も重要なことであるとも思っています。そして、間もなく2年間の努力が修了という形で実を結ぶ段階にあります。これをゴールではなく、通過点として、これら学んだことを、今後のキャリアに生かしていきたいと思います。

2年間の大学院での生活は、研究・講義・学会参加・先生の研究のお手伝い等、とても目まぐるしいものでありました。それでも、知識と忍耐力・継続力を身に着けることができ、今では大学院進学という2年前の自分の選択は正しかったと実感しております。最後になりましたが、大学院での2年間、様々な先生方のご指導のおかげで多くのことを学ぶことができました。私は卒後、博士後期課程へ進学はせずに、県の職員として就職する道を選びましたが、これまで学んだことを生かして、限界を決めずに、自分の可能性を信じて、精進して参りたいと思っています。ご精読、ありがとうございました。

平成29年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	金 丸 博 子 （口腔生命科学）	下歯槽神経損傷後のSemaphorin 3 Aの発現とその機能に関する研究
博士（歯学）	枝 並 直 樹 （口腔生命科学）	Characterization of Dental Pulp Myofibroblasts in Rat Molars after Pulpotomy （ラット臼歯断髄後の歯髄myofibroblastの動態解析）
博士（歯学）	末 山 有希子 （口腔生命科学）	Effect of lipopolysaccharide stimulation on stem cell-associated marker-expressing cells in rat incisors （ラット切歯における幹細胞関連因子発現細胞に対するLPS刺激の影響）
博士（歯学）	山 本 信 一 （口腔生命科学）	Evaluation of the Ca ion release, pH and surface apatite formation of a prototype tricalcium silicate cement （試作ケイ酸カルシウム系セメントの生体機能性評価（Caイオンの放出、pHの変動、析出物の形成））
博士（歯学）	斎 藤 美 樹 （口腔生命科学）	Repeated transfection of human deciduous teeth-derived dental pulp cells with reprogramming factors enables efficient generation of multipotent intermediate cells that are more susceptible to iPS cell formation （脱落乳歯由来歯髄細胞への初期化因子の繰り返し遺伝子導入は、iPS細胞樹立途中の多能性中間細胞の効率的な樹立を可能にする）
博士（歯学）	丸 山 直 美 （口腔生命科学）	刷掃指導の効果 －三次元動作と歯垢除去効果の解析－
博士（歯学）	村 井 朋 代 （口腔生命科学）	介助磨きの姿勢は歯みがき運動と歯垢除去効果に影響する
博士（歯学）	北 村 厚 （口腔生命科学）	Primary cilia regulate mandibular development （一次繊毛は下顎の発生を制御する）
博士（歯学）	鈴 木 英 弘 （口腔生命科学）	学童期検診における開口量および開閉口時顎関節音の縦断的調査
博士（歯学）	隅 田 賢 正 （口腔生命科学）	Cytoplasmic expression of SOX 9 as a poor prognostic factor for oral squamous cell carcinoma （口腔扁平上皮癌におけるSOX 9 細胞質陽性は予後不良予測因子となる）
博士（歯学）	中 村 太 （口腔生命科学）	光学式モーションキャプチャ・システムによる歯科診療動作の定量的解析
博士（歯学）	黒 木 歩 （口腔生命科学）	Association of liver enzyme levels and alveolar bone loss: a cross-sectional clinical study in Sado Island （血中肝機能マーカー高値と歯槽骨吸収度との間の関連性解析：佐渡市における臨床横断研究）
博士（歯学）	佐 藤 圭 祐 （口腔生命科学）	Aggravation of collagen-induced arthritis by orally administered <i>Porphyromonas gingivalis</i> through modulation of the gut microbiota and gut immune system （ <i>Porphyromonas gingivalis</i> 経口投与は腸内細菌叢と腸管免疫応答に影響することで、コラーゲン誘導性関節炎を増悪させる）
博士（歯学）	保 苅 崇 大 （口腔生命科学）	Effects of antimicrobial photodynamic therapy and local administration of minocycline on clinical, microbiological, and inflammatory markers of periodontal pockets （歯周ポケットの臨床、微生物学および炎症マーカーに及ぼす抗菌光線力学療法およびミノサイクリンの局所投与の影響）
博士（歯学）	根 津 新 （口腔生命科学）	Expression of neprilysin in periodontitis-affected gingival tissues （歯周炎罹患歯肉組織におけるネプリライシンの発現）
博士（歯学）	阿 部 遼 （口腔生命科学）	超音波診断装置を用いた骨格性下顎前突症患者の嚥下時舌運動様相の検討

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	中 田 樹 里 （口腔生命科学）	The effect of ROCK inhibitors on bone remodeling and rat experimental tooth movement （ROCK阻害剤の骨代謝およびラットを用いた実験的歯の移動への効果）
博士（歯学）	本 多 綾 子 （口腔生命科学）	クラスター分析による骨格性下顎前突症例における正貌パターンの分類
博士（歯学）	河 村 智 子 （口腔生命科学）	顔面非対称を伴う骨格性下顎前突症例における側頭骨部と下顎骨形態についての三次元分析
博士（歯学）	阿志賀 大 和 （口腔生命科学）	Effect of volition on chewing and swallowing behaviors in healthy humans （健常者において咀嚼の意識化が摂食嚥下運動にもたらす影響）
博士（歯学）	福 田 昌 代 （口腔生命科学）	地域在住自立高齢者における口腔機能と口腔関連QOLの関連性 －台湾の調査から－
博士（歯学）	前 田 留美子 （口腔生命科学）	Inter-individual variation of bolus properties in triggering swallow during chewing in healthy humans （咀嚼時における嚥下閾値の個人差の検討）
博士（歯学）	栗 生 麻 衣 （口腔生命科学）	Assessment of the oral health-related quality of life and the health-related quality of life in the patients with stomatological diseases （口腔疾患を有する患者における口腔関連QOLと健康関連QOLの評価）
博士（歯学）	小 林 太 一 （口腔生命科学）	口腔内超音波走査における粘膜上皮層に関するファントムを用いた基礎的研究

平成29年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻論文博士取得者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	君 雅 水 （口腔生命科学）	小児の顎顔面の表面形態を用いた咬合平面評価システムの開発

平成29年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

専攻分野の名称	氏名（専攻）	論文名
修士 （口腔保健福祉学）	有 賀 彩 乃 （口腔生命福祉学）	児童養護施設退所児童に関する一時データの分析 －「新しい社会的養育ビジョン」との対比－
修士 （口腔保健福祉学）	高 橋 駿 介 （口腔生命福祉学）	高齢者の健康を維持する生活習慣 －食習慣・歯磨き習慣・歯科受診の観点から－
修士 （口腔保健福祉学）	中 川 雪 人 （口腔生命福祉学）	主要分野別の社会福祉法人における労働分配率の比較分析
博士 （口腔保健福祉学）	大 塚 紘 未 （口腔生命福祉学）	介護保険施設における栄養・口腔衛生管理に係る介護報酬請求算定状況と歯科専門職等の参画状況との関連
博士 （口腔保健福祉学）	坂 本 まゆみ （口腔生命福祉学）	特別養護老人ホーム入所者における自発摂食評価と死亡率との関係：2年間の縦断研究
博士 （口腔保健福祉学）	中 野 恵美子 （口腔生命福祉学）	てんかんの食事療法が口腔健康状態に及ぼす影響の検討

臨床研修終了にあたり

臨床研修終了にあたり

Aコース臨床研修歯科医 遠 藤 麻里奈

このたび、臨床研修終了にあたりというテーマで原稿を書かせていただくことになりました、研修歯科医の遠藤麻里奈です。私は、もともと文系の大学に進み、中退して長崎大学歯学部に入り直し、卒業後、東京で2年間の国試浪人の末、ようやく歯科医師になる事が出来ました。

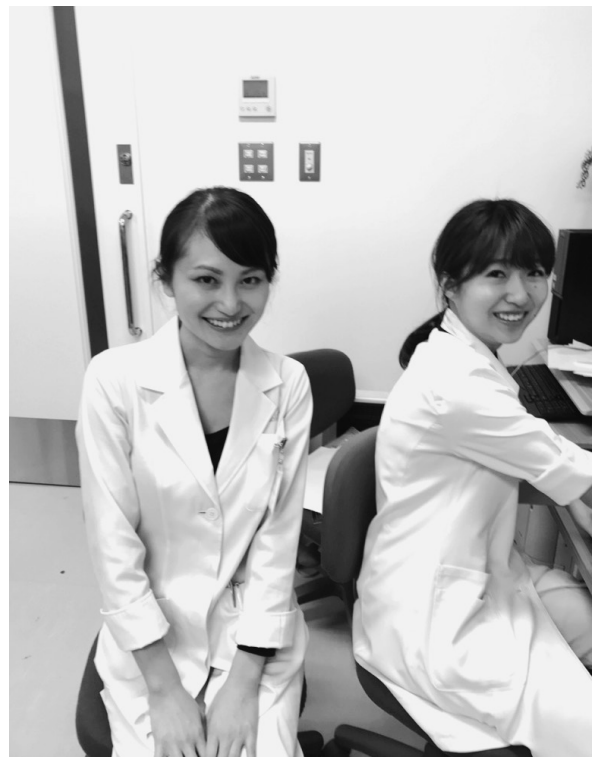
ここ近年は、正直国試に受かることで手一杯だったので、歯科医師になってからのビジョンについて、自分自身について見つめ直す心の余裕がほとんどありませんでした。なので、マッチング先も多くを選択肢に入れる様なことはしていませんでしたが、なにか一つの分野にいきなり特化するのではなく、まずは一般歯科で幅広く臨床経験を養いたい、遠回りして歯科医師になった分、人一倍久しぶりに臨床の場に出るので、しっかりと基礎から指導していただける環境のもとで研修医をしたい、という思いで、新潟大学歯学部出身の友人や先輩の勧めもあって、地元石川県にも近い歯学部附属病院である、新潟大学医歯学総合病院でのAコースを選択しました。

この1年間を振り返ってみると、最初は何もかも分からない事だらけでとまどいや不安も大きく、全くの新しい環境に適応するまで時間がかかってしまいました。しかし、その分、保存、補綴をはじめとした各分野の様々な臨床を経験させて頂いただけでなく、患者さんやスタッフとの接

し方、医療人・社会人としてのあり方、本当に学ぶ事の多い実りある1年間で、想像以上にあっという間でした。同時に、このプログラムで研修することが出来て、幸運だったと思います。

藤井教授、指導医の伊藤先生、その他総合診療部の先生方やスタッフの皆様には本当にお世話になりました。すべてが未経験で右も左もわからない私を様々な面でフォローしてくださり、どんな簡単な事であっても、いつでも優しく熱心に指導していただきました。感謝を申し上げます。

最後に、短い期間でしたが、ありがとうございました。



臨床研修終了にあたり

Bコース臨床研修歯科医 小 貫 和佳奈

本学47期卒後、臨床研修歯科医としてお世話になっております、小貫です。ちょうど一年前（現在2018年2月半ばです）国試受験の直後には歯学部卒業にあたっての原稿を書かせて頂きまして、早いものだなあとしみじみと感じています。

研修先を決めるにあたり一般歯科治療をしっかりやりたい気持ちもありましたが、臨床実習で興味を持ち、もっと勉強したいと思っていた摂食嚥下や口腔外科を学べる環境が整っているBコース（協力型施設、学内専門科で半年ずつの研修プログラム）に魅力を感じ、私は長岡赤十字病院歯科口腔外科と摂食嚥下リハビリテーション科で研修させて頂きました。

長岡赤十字病院は中越の基幹病院で、埋伏智歯抜歯をはじめ顎関節症、舌痛症、嚢胞、良性・悪性腫瘍と幅広い口腔外科症例を経験しました。地域の開業歯科医の先生方との紹介状のやり取りも多く、地域医療連携も学べました。先生は「この先、歯科医師として働く上で赤信号を渡ることは

決していないように」と指導して下さいました。

摂食嚥下リハビリテーション科では、歯科医・言語聴覚士・歯科衛生士がチームとなって行う入院患者さんの摂食嚥下障害に対する介入（摂食嚥下機能評価、嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査を用いた精査、口腔ケア、間接・直接訓練、他科との連携など）や、高齢者施設への往診、ドライマウス・味覚障害の診療などを経験しました。最も考えさせられたのは『おいしく』『食べること』がいかに関わりのQOLに関わるか、ということでした。また医師からの依頼をもとにした介入が大半ですが、摂食嚥下リハビリについても歯科治療についても必要性を感じない患者さんも多く、難しさを感じました。原疾患も症状も経過も多岐に渡り、想像以上にわからない！で溢れていましたが、多くのことを学ばせて頂きました。

半年ずつの研修はあっという間で、まだまだ足りない…！と思いながら修了を迎えますが、この一年間で経験させて頂いたことは全てがとても有意義で、今後の自分の選択に大きな影響となると確信しています。環境を与え、指導してくださった皆様には心から感謝しています。全てを糧に邁進する所存です。





歯学部長 前田 健康

口腔病理学分野教授の採用について

永年空席であった口腔病理学分野教授に田沼順一 平成30年2月1日付。
先生（前朝日大学歯学部教授）が採用されました。

定年退職について

予防歯科学分野宮崎秀夫教授、歯周診断・再建 教授、口腔保健学分野八木稔准教授が本年度末で
学分野吉江弘正教授、歯科矯正学分野森田修一准 定年退職を迎えました。

平成30年度概算要求事項の内示について

平成30年度政府予算案が決定されたことにより、文部科学省より歯学部に関係する項目として以下の内示がありました。

◇基幹運営費交付金（機能強化促進分）

- 戦略① 新潟大学型質保証による学位プログラムの推進を中核とした教学システム改革＜人材養成システム改革＞

◇（プロジェクト）現代社会ニーズに応える実践的口腔医療人育成プログラム等による質保証システム構築－質保証による国内標準化教育モデルの策定・実践－

- 戦略② 「環東アジア」地域教育研究拠点形成と地域社会への還元システム構築＜社会貢献システム確立＞

◇（プロジェクト）国際・地域ネットワーク構築による現代社会的課題の対応－グローバル環境下で育む地域・国際医療福祉貢献－

- 戦略③ 脳・神経科学分野はじめ連携・融合研究促進のためのネットワーク型研究体制転換等によるイノベーション・システムの確立＜イノベーション創出環境醸成＞

◇（プロジェクト）若手研究者が集う
レジリエンスな口腔保健教育研究拠
点の形成ーネットワーク型教員組
織の構築と実質化による総合的な機
能強化ー

なお、戦略①の取組は機能強化促進経費から、
基幹運営交付金化されました。

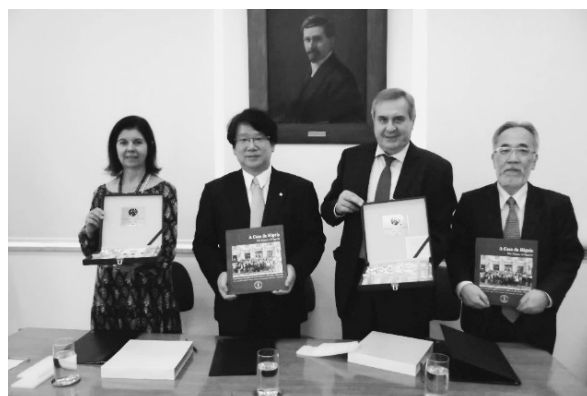
ブラジル・サンパウロ大学公衆衛生学部 ならびに歯学部との部局間交流協定締結について

歯学部ではグローバル人材育成の目標の下、国
際ネットワークの構築を進め、教員の学術交流、
学生の交換留学を進めています。この度、ブラジ
ル・サンパウロ大学公衆衛生学部ならびに歯学部
から部局間交流協定締結の強い要望があり、手続
きを進めてきましたが、この度、手続きが完了し、
前田歯学部長、魚島副学部長（国際交流担当）、
平成30年2月20日にブラジル・サンパウロ市を訪

問し、部局間交流協定を締結しました。サンパウ
ロ大学は南米のリーディング大学であり、この部
局間交流協定には学生交流に関する事項も含むと
ともに、高齢者疫学に関する共同研究が期待され
ています。このほか、フィリピン・マニラセント
ラル大学歯学部、インドネシア・ガジャマダ大学
歯学部との部局間交流協定の更新が行われまし
た。



サンパウロ大学公衆衛生学部、歯学部との部局間交流協定の記念写真



部局間交流協定の更新（左：マニラセントラル大学、右：ガジャマダ大学）

国際共同シンポジウムの開催について

文部科学省の補助を受け、平成29年11月18,19日に台湾・台北市で、平成30年2月11,12日にインドネシア・ジャカルタ市で、国際共同シンポジウムが開催されました。

台湾シンポジウムは新潟大学歯学部と台湾・国立陽明大学歯学部との共催で、台湾の7歯科大学・歯学部の参加を得て、歯学研究のフロンティアによる基調講演、若手研究者による研究発表が行われ、若手研究者のプレゼンテーション能

力の向上が図られるとともに、今後の国際共同研究の進展に議論が深められました。またジャカルタシンポジウムは、本学歯学部とインドネシア・インドネシア大学歯学部との共催で開催され、ASEAN諸国、オーストラリアからの参加を得て、活発な研究発表が行われるとともに、歯学部長会議が開催され、今後の研究者・学生交流について意見交換が行われました。



左：台湾シンポジウムでの記念撮影 右：ジャカルタシンポジウムでの歯学部長会議

部局間交流協定校からの特別講演招聘について

部局間交流協定締結校であるインドネシア・アイルランガ大学歯学部および香港大学歯学部から、学術特別講演を依頼され、インドネシアでは

前田健康教授と前川知樹助教が、香港では泉健次教授と照沼美穂教授が招待講演を行いました。

さくらサイエンスプランの採択

科学技術振興機構（JST）は産学官の緊密な連携により、優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指す「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」を実施しています（<https://ssp.jst.go.jp/outline/index.html>）。この度、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授が提案した「超高齢社会に求められる先進的歯科医学研究Advanced dental and orofacial research required in a super aged society」が、平成28年度に引き続き平成29年度第2回募集に採択されました。本取組では「世界的に高齢社会に向かっていく中で、歯科医療に求

められるのは食べる機能をもつ口腔の医療であると考え、その礎となる歯学研究について、新潟大学で行われている様々な研究を見学・体験する機会を与える」ものとして、タイ・タマサート大学から6名、台湾・陽明大学から4名の若手歯科医師・研究者を招聘しました。平成29年8月21日～平成29年8月30日の期間に来学し、摂食嚥下リハビリテーションや関連する先端歯科医学研究に関する研修を受け、帰国しました。本取組を通して、両国間との国際交流を発展させてタマサート大学からの大学院進学を実現するなど、研究成果の社会発信に今後ますますの貢献が期待されています。

文部科学省補助事業「健康長寿を育む歯学教育コンソーシアム」第4回シンポジウムの開催について

本事業では、歯学教育分野で先導的な役割を果たしてきた5大学（東京医科歯科大学、東北大学、新潟大学、東京歯科大学、日本歯科大学）が国立私立の枠を超えてコンソーシアムを形成し、各大学の強みである教育資源を共有・補完することで、健康長寿を育む為のあらゆるライフステージに対応した全人的歯科医療を担う人材養成の実現

を目指しています。本年度、本学部が当番校となり、平成30年2月9日に新潟大学歯学部講堂にて第4回シンポジウムが開催されました。基調講演として、関西大学森朋子教授による「学生の『分かった』を引き出す反転授業」が行われた後、事業報告及びパネルディスカッションが行われ、活発な意見交換がなされました。

ミャンマー・ヤンゴン大学歯学部への 医療チーム派遣

新潟大学歯学部はミャンマー・ヤンゴン歯科大学と部局間交流協定を締結していますが、Thein Kyu前学長、Shwe Toe学長より、ミャンマーで患者の多い口唇口蓋裂患者に対する医療支援が要望されていました。昨年度に引き続き、顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授と歯科麻酔学分野

の瀬尾憲司教授による医療チームがミャンマーでの医療支援活動を開始しました。ミャンマーでは医薬品等が不足しており、いろいろな分野からの支援を必要としていますので、皆様方のご理解とご協力をお願い致します。

留学生交流支援制度（短期受け入れプログラム 及び短期派遣プログラム）の採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた留学生交流支援制度の採択結果平成30年度分）が通知されました。歯学部から短期派遣事業（短期研修・研究型）として応募していた3プログラムすべてが採択されました。なお、本

事業による奨学金受給には各種制限が設けられており、特に成績不良の学生には奨学金を支給できないこととなりましたので、短期留学希望者は成績向上に努めるようお願いします。



SCRP報告

SCRP報告

歯学科4年 大野 晴 日

2017年8月18日に、私は新潟大学の代表としてSCRPの日本代表選抜大会に出場して参りました。SCRPとは、日本歯科医師会の主催で開催される大会で、各大学により選抜された歯学部所属の学生が、持ちブースで審査員への説明および質疑応答をすべて英語を使用して行う研究発表大会です。

私の発表タイトルは「酒粕抽出物はRunx2を活性化して骨芽細胞分化を促進する」でした。詳しい研究内容の説明はファカルティーアドバイザーを務めて頂いた柿原先生にお任せして、せっかく頂いた文章の場ですので、ご尽力頂いた全ての人への感謝と発表を終えた素直な気持ち、そして発表までの道のりを私なりに皆様へお伝えしたく思います。

私は明確にどの分野で研究を行いたいという意思はあったわけではありませんでした。純粋に英語が好きで、学年が上がったら是非出場したい！というぼんやりとした憧れのまま3年生の冬を迎えました。今年度は薬理学でSCRPの研究をするという先生方のご意向に沿う形で、薬理学教室にて柿原先生のご指導のもと研究を始めました。当初薬理学でまさか研究をするとは思っておらず、研究内容も検討がつきませんでした。ある日の柿原先生からの「日本酒は興味ある？酒粕を使った研究があるんだ」という言葉で新潟の名産品を利用した研究ができるとは大変興味が湧きました。（私は酒どころ新潟の出身で大の日本酒好きでしたので、なんて運命的なんだ！と感じました笑）

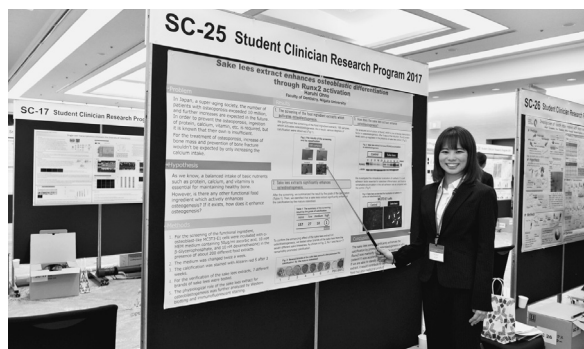
全くもって実験操作は不慣れで、実験結果が出るまでは随分と時間が掛かりました。また、実習が遅くまであったり、ちょうどこの夏は主将を務める弓

道部の現役最後のデンタルがありましたので、研究と実習、部活との両立に頭を悩ませることもありました。ようやく実験結果が出た頃にはSCRP本番はすぐそこに迫っていました。原稿、ポスター、質疑応答対策を最後の数日で終わらせ詰め込み学内予演を行わずに本番迎えるというギリギリさで、先生方には大変ご迷惑をお掛けしました。

当日、全国の大学の代表が他のブースで堂々と発表し、受け答えているのが聞こえてきて、その研究内容の難しさや英語力の高さに圧倒されてしまいました。私の発表では、受けた質問にうまく答えられないもどかしさを感じましたが、胸を張って発表できたと思います。もっと自分の両立がうまくいっていればと後悔することもありましたが、とてもよい思い出となりました。また、SCRPを通して他大学の志の高い同輩や先輩、そして後輩に出会い、同じような悩みを抱えていたり、将来の事を話すことができて嬉しく思いました。

SCRP後は研究は続けていないのですが、歯科医師となった後に研究に携わることも今後の人生設計の1つになりましたし、英語力の向上に努めたいと今一度思いました。

最後になりますが、本大会に参加するにあたり多くの方のご支援とご協力を賜りました。歯学部生の今しか体験することができない、素晴らしい機会を与えてくださった、皆様への感謝を申し上げます。かけがえのないこの経験を胸に日々精進して参りたいと思います。



SCRPをきっかけにして

歯科薬理学分野助教 柿原嘉人

去る平成29年8月、スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会に本学歯学部を代表して、大野晴日さんが研究発表を行いました。『伝統的発酵食品である酒粕が、骨を作る主役である骨芽細胞にどのような効果をもたらすのか？』という酒処新潟ならではの研究テーマです。酒粕は、酒を搾った後の搾り粕ではありますが、“粕（カス）”と呼ぶにはモッタйнаイほどの豊富な栄養素が含まれています。タンパク質を始め、ビタミンやミネラル、必須アミノ酸、糖類などを含み、とても栄養価が高く、また、麹菌や酵母菌の発酵によって生じた二次代謝産物などの生理活性物質も多く含み、近年注目されているスーパーフード（?）です。新潟県のスーパーでは他県に比べて多くの酒粕が売られており、気軽にスーパーで買えるという意味では、確実にスーパーフードです。先人たちは、この酒粕を捨てるのはモッタйнаイと、甘酒、粕漬けや粕汁として食してきました。今もこのモッタйнаイ精神は、クックパッドなどのレシピサイトに脈々と受け継がれ、パンやピザの生地、スポンジケーキ、クリームチーズ、ドレッシング、スムージーなど様々なカタチにアレンジされたものが紹介されていますので、みなさんも是非一度お試しください。

ところで、『なぜ酒粕を骨芽細胞にふりかけようと思ったのか？』その理由については、かつて江戸時代には、酒粕が酒骨（さかぼね）と呼ばれていたこと、また、ローマ字表記するとSAKA BONEとなり、B級サスペンス映画にでてくる暗号のように“BONE（骨）”が浮かび上がってきたというのが最大の理由です。まあ冗談が長くなってしまいましたが、この無謀な研究テーマに、あるときは歯学部弓道部主将、そしてまたあるときは寿司屋のホール係りという二つの顔を持つ大野さんが、忙しい合間を縫って、弓矢をピペットマンに持ち替えながら、一寸の迷いもなく、一生懸命取り組んでくれました。途中、大野さんが家で飼っている高級トカゲちゃん（壱万円ナリ）の体調が悪くなり、トカゲちゃんの容態を案じて骨芽細胞の培地交換をちょっと間違えることも1回くらいはありました（ドンマイ!）。実験は失敗してナンボのもんです。その成果が実り、大野さんは、新潟の上越地方にある小さな酒蔵の酒粕が最も骨芽細胞を元気にするという現象を世界で初めて発見することができました。惜しくも、SCRPでは受賞の一步手前にとどまりましたが、現在、この研究成果は、次の学生たちへ脈々と受け継がれ、今では新潟県内の研究所や酒造メーカーを巻き込んでさらなる発展を遂げており、いつの日かノーベル賞はムリですが、イグノーベル賞を獲る日が来るかもしれません。大野さん、授賞式には一緒に行きましょう。

SSSV報告

オーストラリア短期留学を経験して

歯学科4年 板 離 子

私は、4年生の夏休みを利用して同学年の山本さんとオーストラリアのチャールズスタート大学(CSU)へ約2週間の間、短期留学をさせていただきました。CSUへのSVは今回から始まったプログラムで、私なんかが最初に行ってもいいものかと思っていましたが、せっかくこのように貴重な機会をいただいたのだから、少しでも良い経験になるようにしようと思って準備を進めました。今回、歯学部ニュースという場をお借りして、私たちがCSUで経験したことを多くの人に少しでも伝えることができれば嬉しいです。

今回のプログラムでは、事前にCSUの先生と連絡を取り合い、留学中にやりたいことを具体的に伝えることができたため、学生の臨床実習の見学だけでなく、基礎実習の見学やその講義を受けることもできました。

CSUでは2年生から臨床実習が始まります。最初はクリーニングなど易しいものから始めるのですが、4年生にもなると患者さんへの説明、アマルガムを用いた歯冠修復など、慣れた様子でスムーズに治療を行っていて、同じ4年生であるのに、歯科に関する知識や技術にこんなにも差があるのかと、とても大きな衝撃を受けました。実習において、学生たちは2人ペアになり、それぞれ術者とアシスタントを務めます。3年生は2年生とペアを組んでユニットの使い方や衛生管理、治療内容について教え、4年生は4年生同士でペアを組み、治療に関してお互いに意見を交換しアドバイスをし合っていました。このようにペアを組んで一連の治療を行うことは、お互いの意識や

技術の向上につながり、同じ学生という立場だからこそ気づくことができることも多く、とても魅力的に感じました。

主に3年生が行っていた基礎実習は、基本的に『講義→デモンストレーション→模型実習』という流れになっており、臨床を意識した教育が行われているように感じました。実習室の様子や実習形態が私たちの行っているものとほとんど同じであったり、NISSINの顎模型など日本のメーカーのものを使っていたりするなど、似ている部分も多くありましたが、直前に該当する内容の講義を受けているため、理解しやすく、学習効果が高いのではないかと感じました。

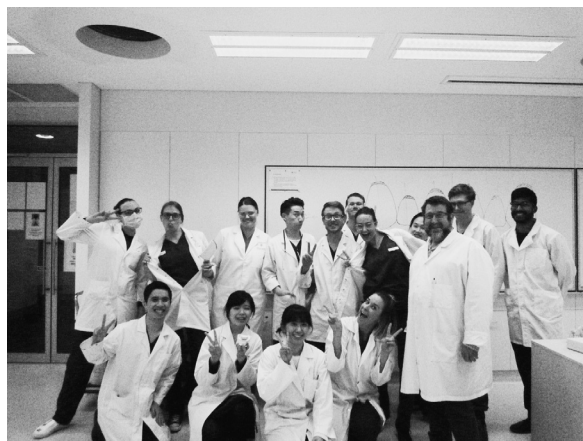
留学中はCSUの寮に滞在しました。私たちが滞在した寮は、月に2回ほど寮のメンバーで食事に行ったり、隣の寮の人たちとネットボールで対決したりするなどイベントも多く、とても楽しい時間を過ごすことができました。また、寮の仲間だけではなく、歯学部の学生や先生方もすぐに私たちのことを覚えて気にかけてくださり、たくさんの人たちのおかげで最初は不安だった留学生活も徐々に楽しめるようになり、自分からコミュニケーションを図ることができるようになりました。

今回、SVに参加して海外へ行ったことで、ここには書き切れないほど多くの素晴らしい経験をすることができ、CSUの学生から多くの刺激を受けました。私たちも春からはいよいよ5年生になり、臨床実習に向けた準備が本格的に始まります。CSUで見たこと、感じたことを今一度思い出して臨みたいと思います。

最後に、今回のSVに関わってくださった石田先生、照沼先生はじめ多くの方々に感謝申し上げます。



寮の仲間たちと食事に行った時のもの



大学の技工室で4年生たちと撮ったもの

タイにまた行きタイ

歯学科4年 加藤 哲也

毎号の歯学部ニュースでSVに関する記事は必ず読んでいますが、海外に短期留学するなんて別世界の人間がすることだと思っていました。7月31日午前0時40分JAL33便、私は引率の魚島先生と言葉も分からない国タイに向かいました。

さて、バンコクに到着した私たちは、国内線に乗り換えてハジャイ国際空港に到着し、プリンスオブソンクラ大学（PSU）に向かいました。想定内でしたが言葉が通じません。ここで私は酷くナーバスになり、一日目にして「先生と一緒に帰りたい」という始末でした。

PSUでの私のカリキュラムは、口腔外科、小児歯科、矯正歯科の見学でした。手術の見学機会がまだ無い私にとって、口腔外科の見学は興味深いものでした。抜歯やインプラントなど日本でも馴染みのある症例はもちろん、拳銃で顔を撃たれた人の顎骨再建手術なども見学し、ここは日本ではないと再認識させられました。実際に治療の補助もして、良い経験でした。小児歯科では齲蝕治療や抜歯を主に見学しました。タイの子供は、場所によっては齲蝕率が非常に高く、大学病院で治療しなければならないほどの症例も多いらしいです。また、全身麻酔下における小児の治療も見学

し、大変貴重な経験をしました。矯正歯科は、予習を兼ねて見学しました。タイは矯正治療が盛んらしく、私が現地で会った人も多くの方が矯正治療をしていました。年齢層も幅広かったです。

日常生活ですが、一番の心配は食事でした。しかし、食事はとてもおいしく日本人の味覚に合うものばかりでした。私は屋台で食べたパッタイという焼きそばが気に入ったのですが、「アローイ（タイ語でおいしい）」と喜ぶ私のことを、現地の人是不思議そうに見ていました。タイの人にとってはごくありふれた食べ物だからだそうです。毎日、色々なお店に連れて行ってもらい、今ではタイ料理が恋しいくらいです。

休日は、車で遠くに連れて行ってもらいました。動物園、お寺巡り、ビーチ、宗教儀式など日本にいたら絶対に経験することができない経験をさせてもらいました。動物園はとてもスケールが大きく、柵も低いので動物を目の前で見ることができました。お寺巡りは、象を祭っているという寺を巡りました。岩山を削って作った寺はとても壮大で、本当に現実の光景なのか分からない位でした。参加した宗教儀式は、これからの人生がスムーズになるようにとの願いを叶えるそうです。楽しい時はあっという間に過ぎるもので、当初はどうなるかと思っていたSVも最終日にはもっとタイにタイ在しタイと思えるほどでした。いつかまたタイに行きタイと常々思うのでした。



SSSV報告

歯学科3年 沼田 真有紀

私は2017年8月2日～12日の期間、インドネシアのガジャマダ大学に短期留学をさせていただきました。ガジャマダ大学は、インドネシアのジョグジャカルタの中心部に所在する国立大学で、インドネシアのなかでも最古で最大の大学の一つです。18もの学部数を有し、5万人以上の学生が在籍します。キャンパスは広大で、自転車を使って周ってもとてもエネルギーがいります。大学の周辺にはたくさんのお店が並び、にぎわっていました。

今回私が参加したのはガジャマダ大学歯学部が毎年開催しているUGM dental summer courseというプログラムで、新潟大学から2人、徳島大学から3人、バリの大学から2人、スマトラの大学から6人の学生が参加しました。他大学合同のSVは他にもあると思いますが、日本人以外の参加者がいる点で特徴的だったのではないかと思います。スケジュールは細かく組まれていて充実した10日間を過ごしました。今回の参加者には高学年の生徒がいなかったため、臨床的な実習や病院見学というより、薬草に関する講義や実習が中心のプログラムでした。インドネシアには貧しい人々が多いため、誰でも気軽に使用できる薬草を用いた齲蝕予防がなされています。講義や実習、課外実習を通して薬草の種類や、加工法について学びました。普段大学で聞くことのない内容の講義で新鮮でした。また、大学のシャトルバスで往復8時間以上かけて山村の地域へ、住民が飲水として使用する川の見学に行きました。その川のフッ素濃度はアパタイト結晶によって非常に高くなっており、住民の歯に着色が見られるなどの影響を目で見て学習しました。プログラムの中で一番衝撃的だった実習は縫合のレクチャーです。半切されたヤギの頭を用いました。結構インパクト強めの光景だったのですが、インドネシア人たちはヤギ

の頭の写真を撮り、インスタグラムにアップしていました…。文化の違いを一番感じた瞬間でした。スケジュールの中には観光もたくさん盛り込まれていました。世界遺産の一つであるポロブドゥール遺跡は、何段もの急な階段を上るのはとても大変でしたが（悟りへの道と言うそうです）、壮観でした。また、キティちゃんの電飾付き四輪自転車に乗せられた日もありました。人と車と四輪自転車で溢れたエレクトリカルパレードのような光景は異様で面白かったです。

夏休み期間中なこともあり、ガジャマダ大学の学生が毎日朝から晩まで付きっきりで対応してくれました。人混みに行く際も前と後ろに学生がついてくれるので常に安心して過ごせました。インドネシアの人々は、少し時間にルーズなところもありますが（笑）、みんな優しくて積極的です。実習などで皆の後ろから見てみると、前に行きなよ、と背中を押してくれます。日を重ねるにつれて参加者同士の仲はとても深まりました。帰国前日の夜には、ホテルの一室に集まり、夜遅い時間まで雑談が尽きませんでした。

インドネシアで初日から対応してくれた友人が、先日新潟大学に短期留学に来てくれました。再会できてとても嬉しかったです。留学生対応にはまだ不慣れな私ですが、恩返しをしたい一心で自分なりに気を配り、その友人をはじめとする留学生の皆さんと会話を楽しむことができました。留学生の皆さんに喜んでもらえると、留学に行ったような気分になるくらい楽しかったです。また、他のインドネシアの友人も今後日本に旅行に来てくれる予定で、留学を通して築いた友人関係を絶やさないようにしていきたいです。

この短期留学では、現地の学生や先生方、同行した2年生の岸本さんと泉先生、魚島先生、石田先生をはじめとする新潟大学の先生方、家族の支えによって沢山の貴重な体験をすることができました。この感謝の気持ちを忘れず、日ごろの行いやネクサスの活動に還元していきたいと思います。



歯周パックを用いた実習にて



ボロブドゥール遺跡



電飾付き四輪自転車



フェアウェルパーティーの様子

国際シンポジウム開催報告

新潟大学・台湾歯学部合同シンポジウム開催報告

生体歯科補綴学分野 長 澤 麻沙子

2017年11月18、19日に台湾の国立陽明大学歯学部にて新潟大学・台湾歯学部合同シンポジウム (International Collaborative Symposium Faculty of Dentistry Niigata University-Schools of Dentistry Taiwanese Universities “Shaping the future of the collaborations in dentistry.” Taipei, Taiwan, 18th and 19th November 2017) が、本学の前田健康学部長・陽明大学のAllen Ming-Lun Hsu学部長を大会長として開催されました。実行委員長の魚島教授の下で、私が新潟大学側の幹事を務めさせていただきましたので、ここにご報告させていただきます。このシンポジウムはグローバルな視野を持った若手育成を推進する文部科学省のねらいに沿う形で、本学の資金提供により毎年開催してきた共同シンポジウムの一環です。内容は摂食嚥下、ニューロサイエンス、インプラント、オーラルヘルスプロモーションの4つをテーマとしたシンポジウムの他、様々な分野からの口演発表およびポスター発表が行われました。新潟からは32人、台湾からも31人程参加し、大学院生や若手教員を中心に英語での発表と活発な質疑応答が行われる場となりました。

台湾の先生方の心温まるお迎えから始まった今回のシンポジウムは、これまで新潟大学歯学部が開催してきた国際シンポジウムとは若干異なり、かなりタイトなスケジュールでした。会場とホテルが離れており、会場周辺には徒歩で出歩ける場所がなかったことから、ほぼ丸2日間、朝9時から夕方5時まで会場に缶詰めでした。ですので、日中は普段知る事の無い他分野の研究を会場でひたすら聞くという、とても貴重な経験ができた

と思います。この類のシンポジウムは他科の先生方、大学院生と交流できる数少ない良い機会でもあることを実感しました。日中の空き時間が無かったので、夜の台湾では皆それぞれが思い思いの台湾を満喫されていたのではないかと思います。

参加者の皆さんが素晴らしいご研究をなさっていることはもちろんのこと、おそらく全ての先生方が感じたのではないかなと思うのが、台湾の方々のおもてなしでした。皆さん、ここまで親切に下さるのか、と思うほど良くして下さいました。シンポジウムの準備段階でのやり取りで、台湾の準備責任者の先生が「台湾に来たら、日本にるように居心地がよく過ごしてもらえようにしたい」とおっしゃっていた意味がよくわかりました。日本人が得意とするおもてなしの心は台湾人でも同じなのだと感じました。

個人的な感想ですが、新潟大学歯学部は何年も前から若手教員・大学院生を、国内のみならず国際的に様々な分野で活躍できる人材に育てよう多大なる努力をしてきたと思います。その結果、私が大学院生だった頃よりも、今の大学院生は英語での発表や質疑応答のレベルが上がっていると感じましたし、若手教員はこういった経験に基づいて歯学部を牽引できる中堅的な存在として、とても頼もしく感じました。私も今後一層努力しようという決意を新たにしました。いずれにしても、海外でのこういったシンポジウムは海外の先生方と交流し、親交を深めることができる機会になるのはもちろんのこと、大学院生や若手教員にとっては英語での発表の場を与えられ、若手でもなくとも研究者や教育者としての視野を広げることができる、本当に良い機会だと改めて実感いたしました。

最後になりましたが、前田先生、Allen Ming-Lun Hsu先生、魚島先生、台湾幹事のWan-Chun Li先生をはじめとしまして、多くのご協力

いただいた先生方にこの場をお借りしまして心よりお礼を申し上げます。新潟大学・台湾歯学部合同シンポジウムが、台湾の先生方とのコラボレー

ションの端緒となりますことを心より祈念し、ここにご報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。



ジャカルタシンポジウム 「International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment」について

予防歯科学分野 小 川 祐 司

2018年2月11日から13日まで、インドネシア・ジャカルタにて、国際シンポジウム「International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment」が新潟大学歯学部主催、インドネシア大学歯学部共催で行われた。人材育成（現代社会に対応する実践的口腔医療人育成プログラム）がメインテーマの本シンポジウムは今回で7回目となり、日本・インドネシアをはじめ、台湾・タイ・オーストラリア・フィリピン・ベトナムから100名余の参加となった。

開会にあたり、Kusdhanyインドネシア大学歯学部長、前田新潟大学歯学部長による歓迎の挨拶があり、続けてインドネシア大学歯学部生による舞踊ダンスが披露されて会場に華を添えた。

5つの特別講演では、東京医科歯科大学江藤名誉教授が日本の高齢者口腔保健の概要を紹介されたのをはじめ、本学齊藤准教授が乳歯由来の組織特異的幹細胞について、依田准教授が頭蓋顔面形成におけるグルコース代謝の役割に関してそれぞれ新しい知見を含めた研究内容を報告、さらにイ

ンドネシア大学からHimawan教授がインドネシアにおける顎関節症の展望について、Soegiharto先生が臨床における矯正治療の重要性についてそれぞれ興味深い講演を行い、参加者と活発な議論を繰り広げた。

また2つのシンポジウムセッションでは、口腔疫学と顎顔面補綴にテーマをおき、口腔疫学は新潟で20年続く高齢者コホート研究を中心にその学術知見が報告され、顎顔面補綴はインドネシアの取り組みをメインに診断からマネジメントまでの多角的な視点での研究最前線が紹介された。

その他、24の一般口演と26のポスター発表が行われ、基礎・臨床・疫学と多岐にわたる研究内容の構成となった。大学院生や若手研究者を含めた英語による議論はそれぞれに切磋琢磨が認められ、各人の英語力向上を後押しする絶好の機会となった。

参加学部長（代理を含む）を囲んでの新潟大学/ASEAN歯学部長会議は、インドネシア大学、ガジャマダ大学、エアランガ大学、陽明大学、チュラロンコン大学、コンケン大学、チェンマイ大学、スラナリー工科大学、タマサート大学、プリンスオブソンクラ大学、ハノイ医科大学、マニラセントラル大学、チャールズスタット大学の13大学の参加のもと開催され、新潟大学歯学部とアジアの交流協定締結校の間で実施している学部学生、大学院学生、教員の人材交流に関する実績報告のほか、次なるシフトアッププログラムを探索する活発な議論が交わされた。



開会で挨拶する前田歯学部長



江藤東京医科歯科大学名誉教授、インドネシア大学歯学部メンバー



講演する依田准教授



講演する齊藤准教授



新潟大学/ASEAN歯学部長会議



初日に行われたウエルカムパーティ

NIH短期留学報告

組織再建口腔外科大学院生 竹 内 涼 子

2017年6月～9月の約3か月間、アメリカ国立衛生研究所（NIH）に短期留学をさせていただきましたので報告いたします。今回の留学に際しまして、JASSO海外留学支援制度および新潟大学歯学部より奨学金の御支援をいただきました。

NIHはアメリカ合衆国メリーランド州ベセスダにあり、ワシントンDC中心部から地下鉄で20分の場所に位置しています。NIH敷地内には、20の研究所と7つのセンターがあり、世界中から研究者やスタッフが集まって働いています。私はその中の歯科頭蓋顔面研究所（NIDCR）に所属し、Molecular Biology Section/Laboratory of Cell and Development BiologyのYoshi Yamada 研究室でお世話になりました。Yoshi 研究室には5名の研究者が在籍しており、一人一つ以上のプロジェクトを担当しています。私もその中のあるプロジェクトを担当させていただくことになりました。私はそれまで基礎研究の経験はなかったので、留学までの準備期間はプロジェクトに関わる論文や資料を読みながらとても恐れ多いような不安な気持ちで過ごしていたのを覚えています。

Yoshi研究室の持つ大きなテーマの一つに、歯の発生に関わる新規の遺伝子やそのメカニズムを解明することがあり、私はその中でもエナメル質形成についてエナメル芽細胞の発達を制御していると考えられるあるレセプターについて調べるプロジェクトに携わらせていただきました。ラボでの決まったスケジュールには、週に一度Yoshi先生とのディスカッションがあり、また二週に一度ラボ全体のセクションミーティングがあります。ここでは毎回一人ひとりがプレゼンテーションを行って、それぞれの研究の進捗状況を周知させお互いにアドバイスや意見などを言い合う場となり

ます。常に新しいデータが出せるよう、またいろいろな意見を出し合えるように発表を工夫するなど、日々の実験からプレゼンテーションの準備まで気を引き締めて過ごせる環境でした。

NIHに行って驚いたことの一つにNIH内のいたるところで講演会やセミナーが頻繁に開催されていることがあります。NIDCR内の講演会や他の研究室との合同セミナーなどの定期セミナーはもちろん、国内外のゲスト研究者による特別講演会も多くありました。私もできるだけ参加していましたが、私にとっては聞き慣れない内容が多いため、必死に聞き取って解釈した内容を一緒に聴講した先輩研究員に話したり後で分からなかったところをかみ砕いて説明してもらうことで理解するようにしていました。

私が滞在していた時期はちょうどアメリカの大学生たちが夏のインターン生として研究者や臨床医の経験をできる期間でもあったので、インターン生向けのセミナーにも便乗して参加していました。全米から厳しい審査を通過して集まった学生たちと一緒にグループワークやディスカッションを行うのは大変刺激的で毎回心地よい苦痛を感じていました。驚いたことに、アメリカはアジア系アメリカ人も少なくないため、見た目で私が外国人（日本人）という認識をされません。学生のような若い人たちはネイティブでない外国人に歩み寄って話すことに慣れておらず、会話は早口でスラングのような言い回しも混ざっているため、学生との会話が一番難しく感じました。

滞在期間中に、NIH内の若手研究者やインターン生向けの大規模なポスター発表のイベントがあり、私もポスターを作成し発表させていただきました。短い期間の中で力を注いで準備してきたつもりでしたが、当日他の人たちの発表を見てその

堂々とした態度やアピールの様子には大変圧倒されました。イベントは2日間に渡り、だんだんとその雰囲気鼓舞され、私も通りがかりの人たちに声をかけて自分から発表したり説明を聞いてもらえるようにアピールできるまでになりました。最初は自分の発表に不安があったり質問に怯える気持ちが強かったものの、話せば話すほど発表を聞いてもらえる嬉しさや楽しさを味わえ、充実感や達成感を強く感じることでできたイベントとなりました。

ここからはNIH以外の事を記したいと思います。滞在3か月間、住んでいたのはNIHのそばにあるシェアハウスでした。アメリカ人のオーナーさん、ドイツ人、イタリア人、フランス人が住んでおり、よくそれぞれの研究の話や他愛ない話をしたり、母国の料理を作り合うこともしばしばありました。シェアハウスといえど大変居心地がよく、またラボ以外でも英語を話せる恵まれた環境でした。ワシントンDCは政治の都市であり他業種の日本人も多いので異業種日本人会にも何度か参加させていただき、普段関わることのない方々とお話することができたことも大変貴重な機会でした。観光では、週末になるとニューヨークやボ

ルティモア、フィラデルフィアといった近隣の都市を巡りました。私は絵画が好きなので、ワシントンDCにあるスミソニアン美術館はもちろん、各都市の美術館巡りができたことは感激で、有名な絵画がいたるところで一気に眺められる空間は贅沢でした。体力的に一番辛かった思い出は、ラボの연구원たちと行ったポトマック川での川下りです。カヌー体験のつもりでワクワクしながら漕ぎ始めたものの、体験どころでは済まず目的地の岸まで下るのに7時間もかかりました。腕、肩、お尻の激痛に耐えながら7時間カヌーを漕ぎ続けたことは忘れられない思い出です。

この3か月を振り返ると、本当にあっという間で1日1日が惜しく感じるほど毎日が充実していました。楽しい思い出だけでなく、悔しい思いや苦しい思いを感じることも沢山ありましたが、すべて含めて出会った人たちや経験したことはかけがえのない財産になりました。滞在中に日記に書き留めてきた沢山の頂いた言葉の数々を思い起こして、これからの励みにしていきたいと思います。最後に、今回の留学に関わってくださった皆様に改めまして感謝を申し上げます。ありがとうございました。



Summer Poster Dayにて



川下り前の笑顔。これから7時間もカヌーを漕ぐことになるとは、、、

When traveling life's journey, it's good to have a sister's hand to hold on to

Division of Comprehensive Prosthodontics Simonne Salazar
Division of Oral and Maxillofacial Surgery Andrea Rei Salazar

A sister's quote says, "When traveling life's journey, it's good to have a sister's hand to hold on to". A quote befitting our strong sibling relationship, our combined strength in going through life's happiness and travails in and out of our home turf.



We are Andrea Rei Salazar and Simonne Salazar, sisters from the Philippines. Currently, both PhD students in Niigata University, Graduate School of Medical and Dental Sciences.

My sister and I had dreams of visiting Japan, long before, as tourists, to witness its unique culture and traditions, view its scenic spots, hobnob with its wonderful people and relish its world-renowned cuisine. But lo! God gave us more- to study and live in Japan.



I am Andrea Rei Salazar, a first year PhD student in the Niigata University, Department of Oral and Maxillofacial Surgery. I am a nurse and dentist by profession. I graduated from the University of the East College of Nursing and am a licensed nurse in the Philippines and the United States. I worked as an Emergency room; Intensive Care Unit and Operating room nurse at St. Gabriel Medical Center, a family owned hospital. While I graduated from Centro Escolar University College of Dentistry Makati Campus as a dentist, the largest private dental school in our country. I am a licensed dentist in the Philippines and had my externship at the Philippine Children's Medical Center Pediatric Dentistry Division. At the moment it is an honor for me and my sister to be among the PhD students of Niigata University.

My sister is Simonne Salazar, a graduating PhD student in the Niigata University Division of Comprehensive

Prosthodontics. She graduated from Centro Escolar University College of Dentistry Makati Campus and was a former teacher in the same University before pursuing postgraduate studies in Japan. She had her externship in the Department of Oral Surgery, in the largest government hospital in our country, The Philippine General Hospital.

Interestingly, we are both PhD students armed with positivity, a world of possibilities and courage that we could conquer the world ahead of us and as sisters we are each others light in darkness and most especially we are each other's torch in happiness and in going through life's journey.



ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学部歯学科5年 荻野奏恵

臨床実習が始まって4カ月。学生でありながら患者さんの治療に参加させていただき緊張と不安、痛感する実力、目標を成し遂げた時の達成感に揉まれながら少しでも早く学生という殻を破ろうと奮闘する毎日ですが、5月11日の登院式で期待と緊張を胸に緑衣に腕を通したことは鮮明に覚えています。

新潟大学では5年生の10月から1年間、大学病院で患者さんの治療をさせていただき臨床実習が行われます。その予備実習としてあるのがポリクリです。ポリクリは5年生の5月から9月までの間、各診療科を回り、臨床現場を身をもって体験します。4年生までは模型相手に実習をしていましたが、ポリクリでは2人1組となって相互実習を行うのが主です。

実習では口腔内の型を取り合ったり、口腔内清掃をしたり、麻酔をしたり、採血をしたりします。中でも1番緊張したのが伝達麻酔の実習でした。先輩から話を聞いていたこともありポリクリの予定表が配布されて1番最初に確認したのが麻酔の実習日でした。数日前からカウントダウンをして心の準備をする人、実習手順を呪文のように唱える人、割り箸を麻酔針の代わりにしてイメージトレーニングをする人（私もやりました）。今だから言えますが、当時はペアの子に緊張を見せまい

と冷静を装っていましたが、いざ注射筒を手につくと震えて口腔内に麻酔液が垂れてしまい先生に後押しされながらなんとか実習を終えました。実習後、申し訳なさでいっぱいの方に「最初に液が漏れていたおかげで刺された時は全然痛くなかったよ」と声をかけてくれた時には少し救われた気がしました。その後の実習で何度かお互いに麻酔を打ち合うことはありましたが、回数を重ねるごとに冷静に対応できている自分がいました。ポリクリで得られた経験は同期がいたからこそだと思います。

お忙しい中時間を割いてとことん付き合ってください先生方、未熟な私たちに快く協力してください患者さん、見えないところでも支えてくださる病院関係者の方々、そしてどんな時も相談相手となり心の支えとなってくれる同期、全ての人に感謝の気持ちを忘れず、立派な歯科医師になって恩返しができるよう努力し続けていきたいと思っています。



ポリクリを終えて

歯学部歯学科5年 飯 島 翼

「ポリクリ」大学生になった頃から先輩たちの会話でよく耳にする言葉だった。

しかし、何をするのか正直分からないまま緑衣を着て当院式を迎えた。ポリクリは各診療科をまわり臨床実習を行うために必要な知識・技能・態度を身に付ける実習であった。その中で最も印象に残っているのが学生同士でお互いに浸潤麻酔をかけたことである。まず、自分が術者として麻酔を打つことになった。ユニットで横になった状態の人の口腔内を診るのでさえ初めてであった自分は、それに加え麻酔を打たなければならないという状況に緊張と恐怖、そして練習相手の友達に対する少しの罪悪感を抱き、手は震え、大量の汗をかいていた。歯科診療において麻酔操作は当たり前のように行われている。こんな基本的なことも十分にできず、臨床における知識も技能も態度もまだまだ不十分であり、当たり前のことを当たり前に行うことの難しさを痛感した。

そこからCBT、OSCEを無事通過し臨床実習が始まった。現在13名の患者さんを担当させていただいているが、臨床実習は毎日が発見の連続である。歯の本数、大きさ、形、舌の大きさ、頬粘

膜の弾性、開口量、咬合など人によって様々だ。虫歯ができれば歯を削って詰める。歯周病になれば歯周基本治療または外科治療をする。教科書にはそう書いてある。しかし、治療する前に「なんで虫歯ができたのか」「なんで歯周病になったのか」を考えなければいけない。人によって多種多様な口腔内状況において虫歯や歯周病になった原因は必ずしも同じではない。根本的な原因を考える重要性や考える楽しさを臨床実習を通じて日々学んでいる。ポリクリの時に感じたように、まだまだ、経験も乏しく、知識も不十分だが歯医者になるための第一歩を踏み始めたことを自覚し日々努力していきたいと思う。



SVでブラジルへいった際に 筆者は左から2番目

ポリクリを終えて

歯学部歯学科5年 武田 渉

今回歯学部ニュースの本題材で原稿依頼を頂いたのが2018年1月下旬。臨床実習が始まり、はや3ヶ月が経ちました。正直なところ“ポリクリを終えて”の項に、何を書くかという事を僕自身とても悩みました。ポリクリに関する詳細な内容は荻野さん、飯島くんが書き記してくれることと思います。

そこで僕の方からは、ポリクリの日々を振り返り、臨床実習に真剣に向き合う今だからこそ感じるポリクリを通しての反省点を書き記し、これからポリクリに臨む後輩たちへのメッセージとさせて頂ければと思います。

ポリクリが始まったのは、5年生の5月。4年生の後期にある多くのテストに合格し、春休み明けからのスタートでした。とうとう5年生まで来て、後期からは臨床実習が始まるのだと意気込みつつも、正直なところ実習に取り組む姿勢は4年生までの頃と変わらないものだったように思います。今思い返してみると、このポリクリの期間をもっと大切にしておくべきだったという後悔が自分の中で非常に大きいように思います。

ポリクリで初めて取り組んだ医療面接練習や口腔外科・麻酔科実習での採血、伝達麻酔の相互実習など、緊張しながらも多くを学び、それは一度経験する事で忘れられないほど印象的なものでした。ですが、臨床実習に上がった今、ポリクリで経験したはずのことが、上手くできない、もしくは忘れていて自分がいる事を日々感じています。

どうしてもあれほど印象的だった経験が、今できないのか。それはやはり自分のポリクリに取り組む姿勢に問題があったように思います。5年生前期までの実習は、模型を使用した実習や相互実習が中心でした。相互実習の相手は長い時間を共にした過ごしたクラスの友人です。しかし、それがひとたび臨床実習に出れば、相手にするのは患者さんという初対面の方々。相手が患者さんとなる

だけで、友人なら簡単に伝わる事も、そう上手くはいかないという現実を痛感しました。

口で言うのは簡単でも実際に行うのは難しい、ということは多くありますが、自分自身の経験から、この項を読んでくれている後輩達に伝えたい事があります。ポリクリは、自分の患者さんに治療を行う前に、これまで培ってきた知識を総括して、臨床現場にそれを落とし込む経験ができる最初で最後の機会です。

これまでの模型実習とは一線を画す緊張感を持って取り組み、自分が経験した実習を家に帰ってから、少し自分の時間を削ってでも復習を欠かさず行う事を強くお勧めします。臨床実習に今後上がってくるみんなのこれからに必ず生きてくると思います。

5年生の4月に開始となりますが、それもすぐに過ぎ去り、夏にはCBT、OSCEと重要な試験が続き、あっという間に臨床実習を迎えます。一度過ぎ去れば二度と取り戻すことの出来ない経験を、本当に大切にしてほしいと心から思います。引き継ぎの際には後輩に恥じぬ先輩でいられるよう、僕自身も今よりさらにギアをあげて臨床実習に取り組みます。日々試行錯誤しながら多くのことを学び、それを後輩に伝えていけたらと思っています。残り少ない歯学部生としての毎日を大切にし、臨床実習へ全力で取り組む49期の仲間たちと共に、国家試験の合格に向けてこれからも切磋琢磨して参りたいと思います。



筆者は後方左から2番目

早期臨床実習を終えて

早期臨床実習を終えて

歯学科1年 片木源太

私たち第一学年は前期期間中、毎週金曜日の午前中に早期臨床実習として先生方の治療の見学や患者の方々の付き添いを行いました。この実習を通して私たちはこれから医療従事者として働いていくという自覚をもつことができたとおもっています。駄文ではありますが、ここにその感想を書かせていただきたいと思います。

私が最も印象に残った実習内容は、患者付き添い実習です。実習内容は患者の方々を治療室までご案内するという内容でしたが、ここで自分が印象に残った理由は二つあります。一つ目は、病院内の把握ができたという点です。私たちの使用していた部屋は歯学部棟内でしたが、実習はもちろん病院内で行われます。歯科の治療が何階で行われているか、歯学部棟へはどうやって戻るのか、初めての世界に戸惑うばかりでありましたが来年

度からはこの場で学ぶゆえ、施設の把握ができたことはよかったと思います。もうひとつは患者の方々との接し方を学べたということです。医療に携わる以上、患者の方々とのコミュニケーションは避けては通ることのできないものとなります。実際診療中の先生方はしっかりと患者の方々の目を見て、わかりやすい表現で説明をなされていました。こういった配慮をまづかで見ることができたことは、これからの自分たちのなすべき姿を見ることができたという意味で大変プラスであったと思います。

自分が述べたのは患者付き添い実習の内容のみでしたが、そのほかの実習も大変充実した内容でした。新潟大学は1年次から実習があるということで、入学前から魅力的に感じていましたが終えてみた今では期待以上のものであったと感じています。冒頭でも書きましたが、この経験はじぶんたちにとって非常に貴重なものでありました。来年から専門科目が始まりますが、初心を忘れず日々研鑽を積んで生きたいと思います。



歯学部 6 年間の入り口で

歯学科 1 年 小 川 祐 未

昨年 4 月、まだコートを手離せなかった肌寒い頃に私は新潟大学の門をくぐりました。あっという間に過ぎた濃密な 1 年間の中で、早期臨床実習は色濃く印象に残っています。入学以前は臨床実習とはある程度の専門的知識・技能を獲得した後、高学年で行われるものだと思っていました。ですが今では、まっさらな状態で臨むこの臨床実習をなぜ全国的に実施していないのか不思議に思います。それは、今しかない学びが数えきれないほどあるからです。

まず治療見学で驚いたのは、患者の方の協力的な姿勢です。歯科医師が口を開けるよう患者の方に伝えたとすぐに応じて下さり、慣れている方は歯科医師の手が口元にくると口を開けて下さいました。この見学を通して、治療は医療者の手だけでなく患者の方と信頼関係を築き、一緒に進めていくものであると気づかされました。

一方で、病院内の設備にも目が留まりました。特に注目したのは引き出しと照明です。引き出しが静音設計で作られていて、勢いよく閉めても最後の数センチはゆっくりと閉まります。また、照明は患者の方の真上にはならない位置にあります。これは身近な先生等にお聞きしましたが、偶然か計算されたものかはわかりませんでした。治療中の患者の方ができるだけ不快な思いをされないように配慮された空間に、感銘を受けました。最近は臨床や研究だけでなく開発や設計にも歯科医師は役立つのではないかと考えています。

この先歯学部や社会に出てからも道のりは長く、喜びにも苦しみにもたくさん出会うでしょう。ですがこの早期臨床実習でしか得られない発見や思いはかけがえのないものです。今後も自分の可能性を最大限に引き出せるよう、勉強はもちろん弓道部、軽音部、五十嵐キャンパスでのダブルホーム活動でも尽力します。ここで楽しく学んでいけることを、同期の仲間たちや先輩、先生方、また家族にも感謝しています。これからもどうぞよろしくお願いします。



バスケットボール部「楽しく、明るく、元気よく」

歯学科4年 本 図 元 希

○バスケ部の紹介

私たち歯学部バスケットボール部は男子部18名（プレーヤー13名、マネージャー5名）、女子部15名（プレーヤー12名、マネージャー3名）の計35名で日々活動しています。練習は週2～3日で行っており、5月の連休には北日本大会、夏休みには日本歯科学学生総合体育大会通称オールデンタルという大会があります。部員は皆仲良く、学校生活と部活動を両立しています。また、部員1人1人の個性も強く、非常に楽しい部活となっています。

○バスケ部の行事

バスケ部は部活動以外にも様々な行事があります。春にはお花見やキャンプ、夏には浜コンや花火大会、全国各地に行くオールデンタル、冬にはクリスマス会やスノーボー合宿、追いコンなどがあり、また大会の後には飲み会を開催したり、日ごろ私たちを支えてくれているマネージャーの誕生日にはその都度お祝いをしたりしています。このような行事を通して1年生～6年生まで男女問わずとても仲良くなり、絶えず笑顔があふれる部になっています。

○今年度のオールデンタルに関して

例年私たちバスケットボール部の戦績は芳しくなかったのですが、去年（2016年度）の大会では男子部は数十年ぶりの決勝進出を果たしました。今年は去年の反省を生かし部活のメニューも大幅に変え、部活が終わった後には走り込みを行い部員全員死ぬ気で練習してきました。そして挑んだ大会でしたが、全試合惜しくも敗北してしまいました。今まで必死に練習してきただけに非常に残念な気持ちでいっぱいでした。しかし、得るもの

も多く、決して努力が報われなかったわけではなかったと感じています。女子部に関しては例年どおり危なげなく決勝に進出し強豪校の風格を醸し出していて感服でした。男子部、女子部ともに六年生が完全に引退してしまい、これからは人数も減り練習も満足にできない状況になりつつあります。しかし、私たちは数少ないメンバーで一致団結してより良い部活にできるように頑張っています。また外部から練習に来てくれる仲間、仕事の合間をぬってでも来てくれるOBの方々、私たちの部活動の環境が少しでも良くなるようにと経済的な支援をしてくださる先生方、そして存在だけでも部員に安心感を与えてくれるのに、加えて仕事までしてくれるマネージャー、私たちを支えてくれている方々は、自分たちが思っている以上にずっと尊く、そしてとてもありがたい存在であることに日々気付かされ、とても感謝しています。私たちを支えてくださっている全ての皆さまの期待に、部員一同全力のプレーで応えていきたいと思っています。そして、「明るく、楽しく、元気よく」をモットーに部員全員楽しんでいきたいと思っています。



卓球部「歯学部卓球部で見つけた答え」

歯学部卓球部主将 田 村 洋 貴

最近オリンピックや世界選手権での若い男女の日本選手の活躍のおかげで、テレビで卓球の試合を観る方がたくさん増えました。今まで全く関心のなかったダイナミックなドライブの打ち合いや高速ラリーの見てたえに面白さや興味を持ってもらえるようになりました。卓球の認知度が高まるのが、卓球を愛してやまない部員達にとってうれしい限りです。

ここで少し卓球の楽しさについてお話します。卓球は老若男女、ラケットさえ握れば今すぐに平等にプレーができます。もっと深く言えば、卓球は体力や運動能力に恵まれている人だけが、必ずしも勝つわけではないのです。卓球には、いろいろな戦い方があるからです。手先を器用に使いこなし、頭をフル回転させ、相手の弱点さえわかれば、勝つことができます。市民大会では、幼稚園児から80代と幅広く、中には素晴らしく力強いプレーをする選手にたくさん出会います。皆さんの中には、幼い日の愛ちゃんの姿の記憶があるかと思います。また、個人スポーツなので、エントリーさえすれば、あらゆる試合に参加できます。それが世代を超え、生涯スポーツとして世界中から長く愛されるわけかもしれません。

さて、今年のデンタルでは、新大卓球部が素晴らしい結果を残すことができました。女子は団体戦準優勝、特に男子は10年ぶりにベスト4という快挙を成し遂げました。入賞の瞬間、恥も外聞もなく全員男泣きでした。部長としてこの瞬間に立ち会えたことが、一生の誇りになりました。私が部長として、一番大切にしたことは、「楽しくないことを毎日続ける馬鹿はいない、楽しければまた練習に来る。」という言葉に尽きます。だから

その人その人にあった楽しい練習メニューを立てただけでした。今こんなドヤ顔文章を書いている私ですが、卓球には苦い思い出ばかりでした。

「野球をやりたい。」小学生の私の希望と裏腹に、母が連れて行ったところは卓球場でした。後々その理由を尋ねると、「応援するのに暑くないからね。」という答えが真顔で返ってきました。私は小学生なりに、ユニフォームがダサい、動きがセコイ、やっている人はなぜか暗いというイメージだけでした。しかし開けたドアの向こうは、全く違っていました。一瞬で私を虜にしました。しかし中学は最弱チーム。打つ相手もいなく、県大会以上は進めません。かつての卓球場の仲間が次々入賞していく姿が、羨ましくて仕方ありませんでした。高校は強豪校。当たり前ですが、たくさんの実力者がおり、厳しい練習や規則が窮屈で耐えられませんでした。顧問から「茶髪をとるか、卓球をとるか、どちらかにしろ。」と迫られた時、迷わず茶髪を取りました。しかし頭の隅では、いつでも卓球のことが浮かび、不甲斐ない自分を腹立たしく思う三年間でした。新大に入学した時に、私はもう一度、自分を確かめたくて、歯学部卓球部に入部しました。4年間でたくさんの答えが見つかりました。卓球は何よりも楽しくやるのが大事だということです。楽しんだものが一番強い。私自身も楽しみながら、たくさんの部員仲間、OB・OGの先生方との充実した卓球ライフを満喫しています。

最後に卓球部を支えてくださっているOB・OGの先生方に平日頃の感謝をお伝えするとともに、来年のデンタルでも好成績を狙って部員一同、日々精進いたします。

医歯学祭を終えて

口腔生命福祉学科 3 年 春 山 海 帆

2017年度第七回医歯学祭にて歯学部実行委員長を務めさせていただきました、口腔生命福祉学科三年の春山海帆です。今年の医歯学祭は、台風の影響により中止が危惧された場面もありましたが、無事に二日間開催することができました。

今回、私たちは「百花斉放#Flourish」というテーマを掲げていました。これは、「医学部・歯学部の学生一人一人が持つ能力で新潟大学旭町キャンパスにたくさんの花を咲かせるようなイベントにしたい」という想いからです。さらに、二つの学部間の交流のみならず、地域の方々との交流を深めることを目的とした取り組みにもなりました。皆様から見て、これらの目標は達成されていたのでしょうか。

第七回医歯学祭では主に、クラス・部活・有志等の団体による模擬店、部活対抗・模擬店対抗・ミスコンのステージ企画などが様々なアイデアをもとに企画・運営されました。これらのイベントでは、今まで交流のあった仲間だけではなく、準備を通して知り合った人、イベントの会場で偶然居合わせた人などとの新しい絆が生まれる場面が見られたように感じました。他には学部の特色を活かした講演会、赤ちゃん抱っこ・妊婦体験、無料歯科相談などもありました。これらは学生も地域の方も参加しやすいイベントです。今の日本の医療の最先端や現場のこと、普段学生が学んでいることを他学部の生徒や地域の方々に知ってもらえるという貴重な機会だったと思います。また、盲導犬と触れ合うブースや地域の方々によって出

品されるバザー、今年から導入した受験相談などではより地域との交流を深めることができたのではないのでしょうか。また、studio NEXSで行われた後夜祭では、新潟市内の各学校から集められた候補者によるミスコンや、特別ゲストのサリト先生による大型マジックショーなども開催され、大盛り上がりの締めくくりとなりました。他にも実行委員会が力を入れて取り組み、様々な方からの協力を得て運営したイベントは多数あります。しかし、全ての企画を細かく紹介することはなかなか叶いませので、当日に撮影した写真から少しでも二日間の雰囲気を感じ取っていただけたらと思います。

このように、新潟大学医歯学祭は、旭町キャンパスを拠点とし、医療や人間関係を活かしながら、学生たちが工夫を凝らした内容となっております。今回で第七回を迎え、歴史が積み重なってきたことで、先輩方が築いてくださったシステムや地域との関係性にも大変助けられました。もし、これを読んでくださっている皆様が医歯学祭についてよくご存じないのであれば、次回はぜひ会場に足を運んでいただきたいです。

最後になりましたが、第七回医歯学祭の開催にあたり、お力添え頂きました先生方、学友会、OB、各学部の学務係、協賛企業、地域住民の皆様、また、会場に足を運んでくださった皆様、誠にありがとうございました。今後とも新潟大学医歯学祭をよろしくお願い致します。



退職によせて

退職によせて

歯周診断・再建学分野教授 吉 江 弘 正



私は平成30（2018）年3月末をもちまして、新潟大学大学院教授を定年退職することになりました。群馬県の開業歯科医師の次男として生を受け、父の後を継ごうと思い、縁あって新潟

大学歯学部に入學しました。母校である新潟大学を起点として、多くの友人、素晴らしい恩師・先輩、良き同僚・後輩、そして暖かい家族に恵まれ、大学人として充実した日々を過ごさせていただき、47年が過ぎました。

人生は二つの出会い「人との出会い」と「本との出会い」で決まると言われていますが、私にとりましては人との出会いのほうが圧倒的に多くそして強く、これまでにお会いした皆様がたへの感謝の気持ちで一杯です。特に昨今、教育、研究、臨床における資料・写真を整理していき、お世話になった多くの方々のことを思い、幸運な人生を歩むことができましたのも、皆様のお陰であると心より感じております。

新潟大学歯学部で学生生活6年間ののびのびと過ごしながら、学問・研究の面白さを最初に教えていただいたのは、当時解剖学教授の小澤英浩先生でした。卒業後は、故原耕二教授の歯科保存学第二講座に大学院として入局し、「歯周病と免疫」の研究を与えていただき、無我夢中で研究をしました。学位取得後すぐに助手ポジションの機会を得て、学位論文がきっかけとなり米国ボストンのフォーサイス歯科センター、免疫学講座のMA Taubman先生のもとで、2年間留學生活を送りました。学生時代から留學までの経験が、現在まで続けられた研究実績の原点であります。

留學から新潟大学に戻り、多くの優れた先輩の先生がたから歯周治療の指導を受け、また留學中に体験した米国歯周病学会や、日本歯周病学会そして多くの講演会での情報から治療学を学び、歯周病専門医になるのに10年の時がかかりました。理念と実践の重要性はどの分野でも言われていることですが、歯周治療の臨床現場の大切さと難しさは、今も続いている課題であります。また、幸運なことに留學してから4年後には助教授にさせていただき、学生教育の場も多く経験し、教育の難しさと同時に学生が良い反応を示した際の自らの喜びも味わうことが出来ました。研究と治療で得たことのほんの一部でも、学生に伝えられるかどうか、教育の根幹と考えています。

平成11（1999）年7月に、歯科保存学第二講座の第三代教授を拝命しました。今も一枚残っていますが、教授就任の挨拶はがきでは、「遺伝子・免疫診断、歯周組織再生再建、歯周炎予防と全身疾患を中心に、国際レベルをめざして教室員とともに、教育・研究・診療に邁進する決意であります」と書きました。退職するにあたり、19年間でどの程度達成できたか自己評価しながら、教育、臨床、研究の成果と特徴を述べたいと思います。

卒前教育では、4年生での講義、基礎実習、5年生で臨床予備実習を基盤として、6年生での患者臨床実習の実施、すなわち患者さんに対して学生自身が考えながら手を動かす時間をできる限り多くすることを目的としてきました。学生教育に協力していただける患者さんの減少、患者さんの治療に対する希望の増加により、現場の教員はたいへんであったことと思いますが、この基本方針は全うしたつもりです。一方、大学院教育ですが、英文論文を1編以上作成することと、日本歯周病学会認定医を取得することが必須事項でした。大学院生本人はもとより、直接指導の先生がたのストレスはかなりのものであったと思いますが、すべての大学院生がやり遂げてくれました。

お陰で平成11年度から現在までに学位を取得した先生は68名となりました。

次は、臨床実績であります。歯周病科の現状は、1日あたり約60名の外来患者に対し診療し、1日1-2名の歯周外科手術を行ってきました。平成11年から平成28年までの外来患者数ならびに診療報酬請求額は、ほぼ横ばいで安定した状態でありましたが、この数年わずかに減少傾向にあります。今後、保険外診療の方向性も検討すべき時期にきている感じでおります。歯周病科の特色ある項目として、「歯周病のリスク診断」があげられます。現在まで、歯肉縁下プラーク、歯肉溝滲出液、唾液、血清を使用して、細菌検査、サイトカイン検査、遺伝子検査等を実施してきて、多くの臨床論文を報告してきて、高い評価を得てきたと思います。また、先進医療としてエナメル基質タンパクによる「歯周外科治療におけるバイオ・リジェネレーション法」、細胞治療として「培養骨膜シートによる歯周組織再生法」、「Er/YAGレーザーによる歯石除去」を実施してきました。専門医の養成という面では、平成11年から現在まで、指導医4名、専門医19名、認定医41名が本院の歯周病科から輩出されたこととなりました。

最後は、研究実績であります。研究論文の量と質に関してですが、1999年から19年間で280編を超えており、年平均で15編英語論文を生産していることとなりました。質的観点からインパクトファクター（IF）値ですと、1論文あたり平均3.3となり、歯科界としては妥当な数値ではないかと思っております。次に、研究論文のテーマですが、「病因・病態」、「検査・診断」、「再生療法」、「歯周医学」がそれぞれ約2割を占めており、歯周病学・歯周治療学を基本とする分野としては、きわめてバランスのとれた比率であると考えております。また、論文の主となる対象材料からみると、「患者からの材料による解析論文」が約5.5割、

「動物系の論文」が約2割、「細胞によるインビトロの論文」が約2.5割でありました。この割合は、臨床系分野として極めて健全なことで、私自身満足した誇れるバランスであると確信しております。さらに研究内容ですが、論文の研究内容から、五つに大別することができ、キーワードで列挙しますと、「歯周病と遺伝子多型・遺伝子診断」、「歯周組織の再生治療と機能解析」、「T細胞、熱ショック蛋白（HSP）、トールライク受容体（TLR）、サイトカイン（CK）、歯周医学」、「リウマチ・高齢女性・抗体療法」、「マトリックスメタロプロテアーゼ（MMP）、バイオマーカー、抗菌、歯の発生」でありました。本分野所属者ならびに出身者の学術団体からの受賞は56件となりまして、本人ならびに指導の先生方に感謝の意を表します。

話はすこし変わりますが、教授になりました年から、日本の歯科界を代表し、現在1万人の会員数からなる日本歯周病学会の理事になりました。数年後には常任理事として用語委員長、禁煙推進委員長、医療委員長、学会あり方委員長、そして平成23（2011）年から2年間理事長を務めさせていただきました。これらの経験が、学生や患者さんの個人レベルでの対応から、さらに「国民全体の口腔疾患の対策」と「歯科界の良好な環境作り」について考える力を、私にくださいました。私自身を育てていただいた日本歯周病学会とその関連学会に、心より感謝している次第です。

最後に、新潟大学、新潟大学歯学部、歯学部同窓会、歯周診断・再建学分野と同門会、日本歯周病学会そして歯科界の益々の隆盛を願い、関係の皆様がたのご多幸を祈念しております。

また個人的なことで恐縮ですが、妻博子の熱い祈りに支えられ、職を全うできたことに感謝しています。

新潟ブランドを世界に発信できたか.....

予防歯科学分野 宮 崎 秀 夫



本年3月、新潟大学大学院医歯学系の教授を定年退職となります。堀井欽一初代教授の後任として、1995年12月に旧歯学部予防歯科学講座に赴任しました。以来、22年4か月もの間、ご指導ご鞭撻を賜りました先輩・同僚教授、歯学部発展のためと共に頑張ってきた同僚教職員、叱咤激励とともに温かく受け入れていただいた予防歯科学分野OB諸氏、何より、同じ目標に向かって精魂を込め、教育研究に尽力してくれた分野の先生方には感謝の言葉がありません。ほんとうに有難うございました。

縁あって、新潟大学歯学部の一員に加えていただいたからにはと、「新潟」というブランドをいかに見える形にしていけるかを、常に考えてまいりました。

公衆衛生の情報集積・発信の中核にあるのは、なんといっても世界保健機関（WHO）です。2007年、新潟大学にWHO口腔保健協力センターを設置したのを機に、予防歯科学分野の准教授をProfessional OfficerとしてWHO本部へ派遣し、日本発の、新潟発の口腔保健グローバル戦略を構築してきました。現在は、当分野の大学院修了者がJunior Professional OfficerとしてWHO本部で躍動しています。エクスターンシッププログラムによる派遣大学院生や短期海外留学制度によるWHO研修学部学生を含め、いくつかのロールモデルが提示できたと思っています。

ところで、本学部も創立から50年を経過しました。子供達とう蝕の洪水と歯科医師養成機関の不足、歯科医師の地域偏在が社会問題であった前半から、歯科医師過剰、歯学部・歯科大学の統廃合や学生定員削減、および超高齢社会に向けた歯科保健医療の戦略転換、さらに教育研究の国際化といった後半と、半世紀にわたる歯科界を取り巻く環境は大きく変動しました。すなわち、堀井初代

教授のミッションと私のそれとは、時代背景に大きな影響を受けており、予防歯科学が正に社会歯科学分野といわれる所以です。

堀井初代教授の時代に端を発した、フッ化物洗口プログラムを主軸とした新潟県の学校保健活動の継続に努力を払い、「12歳児のう蝕歯数」は17年連続で全国最少を維持してきました。「新潟発祥」の学校保健プログラムは時間をかけて全国に浸透し、参加児童数は100万人を突破しています。さらに、新潟モデルは「う蝕予防のグッドプラクティス」としてWHOから世界に向け発信しています。今まさに、小児う蝕の多発が社会問題化している途上国では、エビデンスを伴う選択肢の一つとして応用されています。

新潟発祥を世界に発信することを強く意識して戦略的に取り組んだのが、「口臭の国際診断分類」の構築でした。1998年4月に「口臭クリニック」を全国に先駆けて開設したこともあって、同年10月に「口臭臨床ガイドライン」ワークショップをこの地で開催し、口臭の診断分類を策定しました。世界の専門家集団の認知が必須なため英語での作成としました。通常では、可及的速やかに国際誌へ投稿という手順を採るのですが、まず、日本語で新潟歯学会雑誌に掲載することを選択しました。どなたもお気に留めることはなかったと思いますが、敢えて、英語を日本語に翻訳してオリジナル（原著）としたということです。次いで、北米で出版した2編の英語論文に「Niigata Dent J 29: 11-15, 1999」を引用する、並行して、欧米での口臭臨床講演の機会に信を問う、さらに、2001年に主催した第5回国際口臭学会（東京）で議論に議論を重ね、このままの形で国際基準に採択というプロセスをとりました。その後、直ちに周知を図るため、2002年にClassification and examination of halitosisとして国際誌（Int. Dent. J., 52, 181-186, 2002）に掲載し、現在、口臭診断の国際基準として世界で広く使われています。新潟起源としての国際診断基準が僅か4年で完結したことになります。

研究面では、基幹研究となった「新潟高齢者コホート研究」を取り上げなくてはなりません。1998年に70歳新潟市民600名が参加して開始され、

現在なお継続中です。口腔環境の劣悪化を含め口腔健康問題は、それ自体が疾患であると同時に、生活習慣病である癌を始め全身の組織・臓器の慢性疾患に対するリスク因子となっているという科学的根拠を持った論理構築を可能にしました。国内では、健康日本21や新健康フロンティア戦略の重点項目として口腔保健を位置づけ、さらに、学術的裏付けを供給することで、WHOを通した口腔保健世界戦略の発信に寄与しているということからも、社会的インパクトの大きなコホート研究であるといえます。これらの成果は113編（2018年 1月1日時点）の論文として世界に公表されています。医科系の国際誌にも少なからず掲載されており、各論文に散りばめられた「Niigata Elderly Study」は、読者に対して地名「Niigata」をインプットするのに十分な効果を発揮し、「新潟」の認知度は東京、大阪と同レベ

ルになりました（統計処理はしていません）。

最後になりましたが、私は、歯科医師国家試験を意識した講義はしませんでした。既に確立された歯科医学の基礎、すなわち、何十年も前に確立された内容で構成される教科書から試験問題が作成されるわけですが、限られた講義のコマ数で、それらのみに時間を使うのはもったいない。皆様には、2～30年後の歯科医学・医療界のリーダーになってくれると確信し、卒業時点でそのキャリア形成のスタートラインに立っているという前提で講義実習内容の組み立てを意識していたからです。すでに、様々な分野でリーダーシップを発揮していらっしゃる卒業生もいると思いますが、常に理想を持ち、達成可能な目標を立て、それに向かって適確で効率的な戦略を構築していただくことを切に期待いたします。



生涯現役をめざす！

新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野
教授 福島 正義



突然のことですが、2018年3月31日をもちまして早期退職いたしました。本来の定年は天皇陛下のご退位と同じ2019年ですが、1年前倒しの決断でした。その経緯について少し説明させていただきます。60歳を過ぎた頃から定年後の生き方について考えていました。自分の希望は歯科医師として生涯現役で臨床に従事することでした。開業の道もありますが、跡継ぎのいない身では資金調達は無理で、雇われの身しかありませんでした。そうした中で2017年12月上旬に新潟大学歯学部同窓会メールマガジンの求人情報に公立歯科診療所の嘱託医の募集がありました。採用条件は年齢制限がなく、現役の年収が保証される内容でした。自分が希望する100%以上の条件でしたので、早速、年末に現地を訪問して面談し、即決しました。2017年12月26日付で大学へ退職願を提出し、3か月間で離職作業を行い、2018年4月1日赴任となりました。新しい勤務先は福島県南会津地方の大沼郡昭和村国民健康保険診療所（内科と歯科）です。昭和村は人口約1,300人で福島県第2位の高齢化率55%の豪雪地です。最寄りの駅はJR会津川口駅あるいは会津鉄道の会津田島駅になりますが、いずれも村から車で40分かかります。新潟市からは磐越自動車道を利用すると2時間ほどです。私は子供の頃は国有林を管理する営林署に勤務する父親の関係で山暮らしをしていましたので雪や生活の不便さは知っていますし、自然の素晴らしさも知っています。そのせいか、勤務先に迷いはありませんでした。奇しくも2018年は戊辰戦争終結150年にあたり、その節目の年に会津の地へ赴任するのも何かの縁と感じています。今までの自己紹介では「新潟（大学）の福島」でしたが、今後は「福島」の福島となります。会津魂の「義」を重んじて「福島の正義」を愚直に

貫く後半の人生にしたいと思います。

さて、これまでを振り返りますと新潟大学歯学部に入塾してから46年、大学教員として35年の年月が流れました。教え子は親子2代にわたっています。1978年3月に本学を8期生として卒業し、細田裕康教授の歯科保存学第一教室（現う蝕学分野）へ大学院生として入局しました。学位論文の研究テーマはう蝕象牙質内への接着性レジンの浸入に関するものでした。う蝕検知液の染色性を指標としたう蝕象牙質の除去基準を「淡いピンク染」までとしたのはその研究の一部によるものでした。これがその後、教科書、国家試験問題やう蝕治療ガイドラインにも取り上げられました。大学院修了後、1982年4月より助手に採用されました。同年6月に細田裕康教授が東京医科歯科大学の総山孝雄教授の後任として母校へ戻れることになり、後任として同年11月に岩久正明教授が着任されました。以来、2003年3月までの約20年間にわたり、岩久正明教授の下で仕事をさせていただきました。この間には水銀による環境汚染が問題となった歯科用アマルガムからの脱却という社会的要請を受けて臼歯修復用コンポジットレジンの実用化、テトラサイクリン変色歯の自然美改善のためのポーセレンラミネートベニア修復法の確立と国内初の変色歯外来の開設、金銀パラジウムによる金属修復の脱却をめざしたセレクトシステムによるCAD/CAMセラミック修復の研究と高度先進医療としてCAD/CAM外来の開設、要介護高齢者の口腔ケアの効果に関する研究などを行いました。特にここ10年間は日本歯科保存学会でう蝕治療ガイドライン作成にかかわり、わが国のう蝕治療に大きな影響を与えることができました。

2000年4月からは歯学部附属病院総合診療部（現歯科総合診療部）の立ち上げのために転籍しました。2001年10月には興地隆史先生（現東京医科歯科大学歯学部長）を総合診療部教授にお迎えし、私も同年11月に助教授に昇任させていただきました。

2004年4月からは日本で初めて歯学部を設置された4年制の歯科衛生士および社会福祉士養成の口腔生命福祉学科の教授に就任しました。当時、

私は歯科衛生士および社会福祉士の教育については全くの素人でした。今にしては恥ずかしいことですが、歯科衛生士の3大教育科目と問われた時、「歯科保存学」「歯科補綴学」「口腔外科」と答えたのが始まりです。「予防処置」「保健指導」「歯科診療補助」と素早く答えられるようになるまで数年かかりました。現在は全国165校の歯科衛生士養成校が加盟する全国歯科衛生士教育協議会の副理事長、日本歯科衛生学会顧問や日本歯科衛生教育学会理事を務めています。口腔生命福祉学科は2010年より大学院講座になりました。私もこれまで延べ9名の歯科衛生士大学院生の指導をしました。自分が以前から専門にしてきた歯科保存学とは全く異なる歯科衛生学領域の調査研究や質的研究を行いました。本学科の卒業生は歯科医院や病院歯科に勤務する者もありますが、行政、社会福祉団体、医療ソーシャルワーカーなど歯科

以外の領域にも進出しています。2017年7月に口腔生命福祉学科の「卒業生の集い2017」が開催され、1～10期の卒業生266名のうち約半数が集合しました。彼らの成長は期待していた以上のもので、われわれの教育方針が間違っていなかったと感慨を新たにしました。

私生活では4人の子供（2男2女）を育て、孫は7人になりました。上の孫は今春、高校生になります。どこの家庭も同じと思いますが、これに至るまではいろいろと苦労がありました。平凡に生きるということは最も大変なことであり、皆が健康に生まれ、生活していることは“奇跡”であると思います。家内、両親や周囲の支えに感謝しています。

どうか、皆様も健康に十分留意されてそれぞれの立場でご活躍されますようにお祈りしております。

長い間、本当にありがとうございました。



記憶の中の本：退職によせて

口腔保健学分野 八 木 稔



時節柄ますますご清祥のこととお慶び申し上げます
さて 私こと
2018年3月をもって定年退職することとなりました
在職中は公私ともども一方ならぬご懇情を賜り厚くお礼申し上げます

この機会に「歯学部ニュース」に執筆するよう依頼されました。そこで、思い出すこと、とくに本に関することの一部を記させてもらうことで、ご依頼に応えたいと存じます。歯学に関する本のうち、在職中に読んだ本ではなく、それ以前の歯学部の学生時代の記憶の中に残っており、いまの私の専門領域の研究・教育につながっているのではないと思われる本、それら2冊の本について記すことにします。

1. 焼けてしまった本

まだ寒さの残る朝、歯学部生であった私は、突然の訪問者に起こされることになりました。部屋の入り口に立っていたのは、人形二体と一人を帯同したかつての同級生、そのときは一年上の学年でした。聞けば部屋が火災に遭い、それらの人形をやっとのことで連れ出したとのこと、しかも、私から借りていた歯科理工学の成書：和訳本3分冊のうちの1つが焼けこげてしまったとのことでした。その成書は、当時レポート作成に必須というべきもので、近づく実習には欠かせないものでした。借りた当人は「同じ本を購入して返す」といつてくれました。それに対して私は「訳本でなく原本の方を買ってくれないか」と頼みました。訳本の1分冊だけで原本の値段と同じ。「それで良ければ」ということで本を借りた当人は、その約束と人形二体を私の部屋に残し、とりあえずの避難先を目指して立ち去りました。

その後に受取った原本¹⁾は、黄緑のソフトカ

バーの表紙に表題だけというシンプルなデザイン。「アジア版」ということで日本の出版社も関わっていた書籍らしく、和訳本のがっちりした装丁に比べて原本の簡素な体裁に、その本を持っていること自体が楽しいという感覚を覚えたものです。当時はワープロもなく、実習のコマごとにレポート作成（プレ・レポートに、ポスト・レポート！）、そのとき成書から漢字仮名で手記することは、私にとって結構辛い作業でしたが、和訳を参照しつつ、その部分をアルファベットで手記することで、かなり楽な作業になったと感じたことを覚えています。

その原本は、いつしか手元から失せてしまいましたが、旭町図書館の一階の書架に、同じ原本一冊が収められています。そこで、この機会に借り出して、40年ぶりに手に取ってみました。

同書の20から22章までは、歯科アマルガムについての記載です。いまや歯科アマルガムとは、歴史的な材料の一つなのでしょう。「歯科アマルガム充填に際して鹿皮を準備する」と聞いて、「あれか」と具体的なイメージをもつ方々も少なくなっています。「う蝕の洪水」といわれた時期、小児に対する歯科アマルガム充填には、二次う蝕の発生がしばしば報告されました。実証的なデータは探っていませんが、地域に導入されたフッ化物洗口プログラムとの組み合わせによって歯科アマルガム二次う蝕の発生が、かなり押さえられたという印象をもった経験があります。

1) Phillips, R. W.: Skinner's Science of dental materials, 7th edition, Asian edition, 1973, W. B. Saunders Company, Igaku Shoin LTD, Tokyo.

2. 歯の萌出の「どうやって」と「なぜ」

歯の発生学の時、手ずから歯の萌出過程をボードに示されて講義される教授がいっぱいました。その教授がいわれるには「諸君らは、歯がどうやって萌出するか（生えてくるか）分かりますか。それをレポートにまとめて提出してください」とのこと。同時に「どうやって歯が萌出するかは分かるかも知れませんが、なぜ歯が萌出するのかということは分からないでしょうね」「こ

れはね、いまの私にも、そしておそらくだれにも答えることができない謎なのです」とも言われました。

確かに、なぜ歯は生えてくるのでしょうか。う蝕あるいは歯周病というリスクのある領域に、なぜ歯は、わざわざ出現するのでしょうか。そのまま顎の中に留まっていれば、そうしたリスクを負うことがないにもかかわらず。学問に占める「どうやってHOW」と「なぜWHY」との関わりに思いを巡らした一瞬でした。

とはいえ、レポートをまとめなければなりません。当時、歯の萌出のメカニズムを詳述した和文の成書が見当たらず、そのとき英文の成書の紹介がありました。それが「オルバンの口腔の組織学と発生学」²⁾でした。今回、同書を手にするべく図書館を探したところ、懐かしや、青い表紙のその本を見つけ出しました。頁を繰ると第11章に「歯の萌出」、そのつぎの頁に「図11-1.ヒト胎児（4カ月）の下顎乳臼歯の断面」、この図に見覚えあり、まさにこの本です。

さて、「どうやってHOW」と「なぜWHY」とについて、例えば、う蝕予防における効果、安全性、およびメカニズム（HOW）が生物学的には認め

られているフッ化物応用であっても、その普及には、なぜ差があるのか、その理由（WHY）については、むしろ社会学的な研究の視点が必要です（さすがに、歯の萌出の理由が社会学的な視点で解明できるとは思いませんが）。ただ、自然現象だけが歯学における研究の対象ではなく、社会的な現象もまた研究の対象となります。さらには、人文学的な対象や方法（想定としては、歯科専門職のフッ化物応用に対する心的な現象と導入への意思決定など）が必要とされるかも知れません。視点を変えた研究が、これからの課題であろうと思います。

2) Sicher, H. et al: Orban's Oral histology and embryology, 7th edition, Chapter 11 Eruption of the teeth, 298 - 315, Mosby, 1972, Saint Louis.

皆様のご支援とご協力によりまして充実した日々を過ごすことができました。

人生の大きな転機を迎え今後もさらに実り多き人生にしたいと願っております。

何とぞ変わらぬご厚情を賜りますようお願い申し上げます。



学会受賞報告

2017年度日本歯周病学会学術賞

2017年度日本歯周病学会学術賞を受賞して

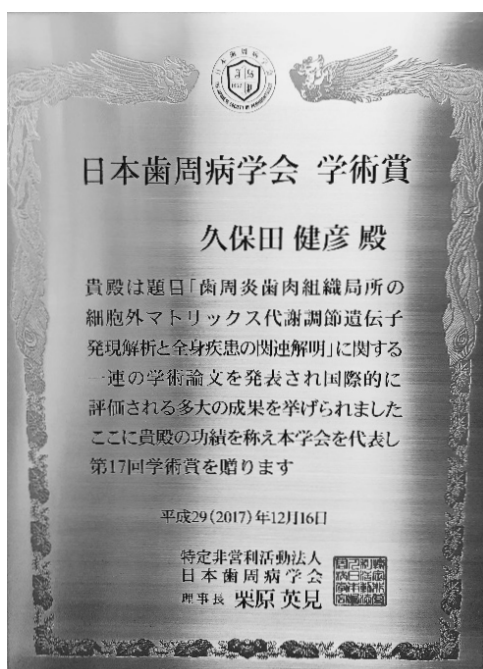
新潟大学医歯学総合病院 歯周病科 新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯周診断・再建学分野 久保田 健彦

このたび2017年度日本歯周病学会学術賞を拝受いたしましたので（授賞式：2017年度日本歯周病学会60周年記念大会・京都）、ご報告させていただきます。2009年に日本歯科保存学会で同賞を頂きましたが（<http://www.hozon.or.jp/member/award/science.html>）この歯周病学会記念大会にあらためて学術賞を受賞できたことはその後8年間の継続研究が認められたことと感謝し本当に光栄に存じます。受賞は自身の博士論文から大学院生の指導最新論文に至る一連の研究が対象で、代表16論文を「歯周炎歯肉組織局所の細胞外マトリックス代謝調節遺伝子発現解析と全身疾患との関連解明」としてまとめました。総説が後ほど（<http://www.perio.jp/member/award/science.shtml>）に載ると思いますのでご覧ください。ただけなら幸いです。

簡単に研究を紹介しますと、歯肉炎から歯周炎に移行する際には、歯根膜組織付着の喪失と歯槽骨破壊が起こりますが、我々はこの歯周組織（Collagenに代表される細胞外マトリックス）破壊における責任酵素であるMatrix metalloproteinases (MMPs) とそのインヒビターであるTissue inhibitors of metalloproteinases (TIMPs) に着目して25年以上研究してきました。対象はヒト生体サンプルである歯周炎罹患歯肉組織あるいは末梢血好中球を用い、遺伝子発現解析を中心に分子生物学的・免疫組織学的手法により多角的に検索してきました。歯周病は、細菌感染

症ですが遺伝と環境因子が複雑に関係する多因子性疾患です。同じ人の口腔内でも時間や部位によって歯周病の進行は異なります（Socransky *et al* 1984）。1992年当初、画期的であった分子生物学的手法ポリメラーゼ連鎖反応（PCR法）を歯周病研究に取り入れ、歯周炎罹患歯肉局所において細胞がタンパク合成するための遺伝子転写産物mRNAをTargetにqRT-PCR, RAP-PCR, *in situ* hybridization, 全遺伝子網羅的遺伝子解析（Transcriptomes）へ発展的に研究してきました。Taqman® PCRは遺伝子多型の解析にも応用し口腔がん診断法として口腔外科永田先生らと特許公開しています。近年では、歯周炎と全身疾患（アルツハイマー病など加齢慢性炎症性疾患）に関わる病因論にアプローチするとともに、産学協同研究や新規歯周組織再生に関わる遺伝子・タンパク質、社会人大学院生や歯周病専門医マルチセンター臨床トランスレーショナル研究まで多角的に研究を進めています。

最後に、研究を始めて26年、学内外共同研究者の方はもとより大学院時代に初めて研究を教わった野村隆先生、高橋徳也先生、松木裕先生、研究を励まして下さった故原耕二名誉教授、吉江前教授をはじめ、学内では丸山先生、濃野先生にもお世話になりました。そして研究班の先生・大学院生と研究環境を整えて下さった講座関係各位、全ての方に心から感謝して本賞を捧げたいと存じます。本当にありがとうございました。



表彰式にて：栗原理事長・ライオンプレゼンター

第59回歯科基礎医学会学術大会 優秀ポスター発表賞（生理学部門）を受賞して

摂食嚥下リハビリテーション学分野 那小屋 公 太

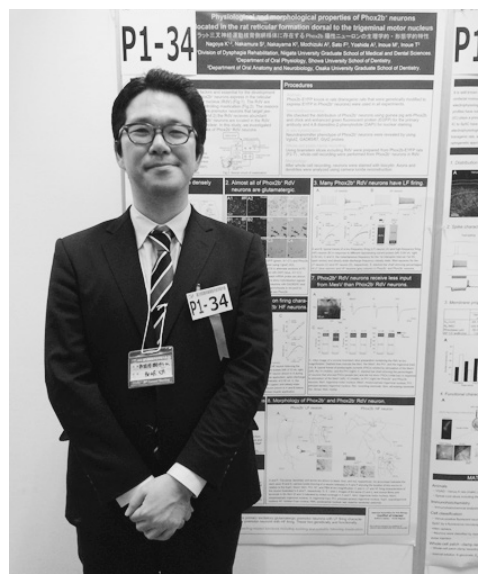
この度、平成29年9月16日～18日に松本歯科大学で開催されました第59回歯科基礎医学会学術大会においてモリタ優秀ポスター発表賞（生理学部門）を受賞致しましたのでご報告させていただきます。「ラット三叉神経運動核背側網様体に存在するPhox2b陽性ニューロンの生理学的・形態学的特性」という演題名にて、咀嚼運動制御に重要な領域と考えられている三叉神経運動核背側網様体に存在するPhox2bという転写因子を持つニューロンの特性について発表致しました。

咀嚼運動は咀嚼の中枢性パターン発生器（central pattern generator: CPG）により制御されており、咀嚼筋の筋活動を支配する三叉神経運動ニューロンに軸索を送るプレモーターニューロンはその一端を担っていると考えられています。過去の報告より、このプレモーターニューロン群が三叉神経運動核背側網様体（RdV）に多数分布していることが報告されました。また、RdVには自律神経中枢の発生に関与する転写因子Phox2bを持つニューロン（Phox2b陽性ニューロン）が高密度に分布していることが知られています。しかし、咀嚼運動制御に重要な役割を果たしていると考えられているRdVに分布するPhox2b陽性ニューロンがどのような役割を果たしているかは不明です。そこで本研究では、RdVに分布するPhox2b陽性ニューロンの電気生理学的及び形態学的特性を明らかにすることを目的に実験を行いました。その結果、RdVに分布するPhox2b陽性ニューロンの大部分は興奮性であり、自発発火を認めない低頻度発火ニューロンであったのに対し、RdVに分布するPhox2bを持たないPhox2b陰性ニューロンの多くは抑制性であり、自発発火を示す高頻度発火

ニューロンであることがわかりました。また、RdVに分布するPhox2b陽性及び陰性ニューロンの半数は三叉神経運動ニューロンのプレモーターニューロンであることが形態学的解析から明らかになりました。以上より、異なる性質を有するPhox2b陽性ニューロンとPhox2b陰性ニューロンが協調して吸啜や咀嚼を含む摂食関連行動を調節している可能性が考えられました。

発表後、他大学の先生方から多数の質問や今後の実験につながるご意見を頂き、大変有意義な学会となりました。今回得られた知見をもとに、さらに面白い結果を報告できるよう今後の実験に精進したいと思います。

最後になりましたが、ご指導頂きました昭和大学口腔生理学教室の井上富雄教授、中村史朗准教授、発表に際しましてご助言頂きました井上誠教授をはじめとする摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



受賞報告

新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野
新潟リハビリテーション大学リハビリテーション学科言語聴覚学専攻

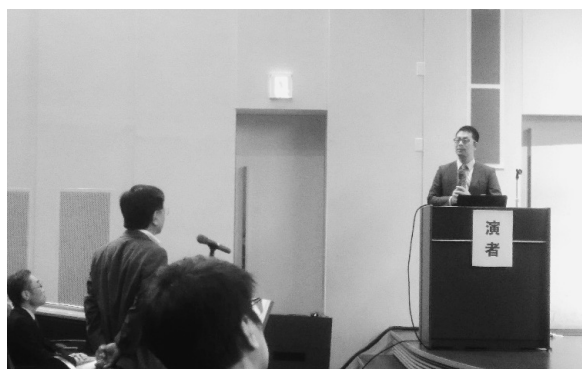
阿志賀 大 和

この度、平成29年11月25日（土）～26日（日）に長崎大学にて開催されました第59回日本顎口腔機能学会学術大会において、優秀賞をいただくことができましたのでここにご報告いたします。

今回の受賞した演題は「咀嚼の意識化による咀嚼および嚥下の変調について」でした。普段は意識することなく行っている咀嚼から嚥下までの一連の流れのうち、咀嚼を意識することで咀嚼や嚥下にどのような変化が生じるかを、ヒトを対象とした生理実験によって検証したものです。普段通りに食べた時の咀嚼運動から求めた咀嚼回数や時間を指定することで、咀嚼筋活動だけでなく、咀嚼時の食塊移送や嚥下運動にも大きく変化が生じるということを明らかにしました。発表時には多くの質問をいただき、発表後にもフロアで意見交換をすることができました。受賞することができたということも含め、自分が筆頭で発表した演題に対して、学会に参加された先生方が興味・関心を持ってくださったことを大変嬉しく感じています。

大学院生活の最後の年にこのような賞をいただくことができましたが、これに満足することなく、今回の受賞を励みに今後も少しずつ研究を重ね、少しでも摂食嚥下障害で困っている方たちのお役に立てるよう励んでいきたいと思います。

最後になりましたが、発表直前までとても熱心にご指導いただいた摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授をはじめ、研究実施にご協力いただいた先生方に、この場を借りて心より感謝申し上げます。



「日本歯科医学会 第33回「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」 優秀発表賞を受賞して」

生体歯科補綴学分野 秋 葉 陽 介



この度、2018年8月31日に東京で開催されました日本歯科医学会主催の第33回「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」におきまして優秀発表賞を受賞いたしましたので

ご報告させていただきます。今回受賞の演題は「チタン表面の規格化ナノ構造形成による周辺細胞制御技術とこれを応用した次世代インプラントの開発」です。本研究は早稲田大学ナノ・ライフ創新機構と行なっている共同研究の一つです。

現在デンタルインプラント表面は骨形成の活性化によるオッセオインテグレーションの促進を意図して、ブラスティングやエッチングなどによる粗造化処理がほどこされており、その粗造化構造はナノサイズに至ります。しかしその構造は非規格化のランダムな構造で、ナノサイズの構造が細胞に対して与え得る影響やオッセオインテグレーション促進に関与する蛋白質や無機成分、その機序について不明な点が多いまま、臨床応用が進んでいます。これはチタンに対して規格化ナノ構造を形成することが技術的に困難であることが主な理由でした。当教室では早稲田大学ナノ・ライフ創新機構の協力を得てチタンに対して規格化されたナノサイズの構造を形成し、インプラント表面

と骨との界面においてオッセオインテグレーションに関与する因子の探索とその促進機序の解明、またこれを応用した次世代インプラントの開発を目指した研究を実施しています。今回の受賞研究は、細胞のナノサイズ感受性を検討する過程で得られたデータによるものです。規格化ナノ構造を持ったチタン基盤上において、細胞は配向性をもって増殖し、さらに分裂、伸長方向、細胞形態、細胞骨格配列が基盤上に形成された規格化ナノ構造に影響を受け、ナノ構造のサイズ、形状を変化させる事で、細胞増殖、組織形成も様々に制御可能であることがわかりました。この技術を応用し、特定の配向性を持った組織が形成可能であるデータも示されました。この技術は硬組織、軟組織に広く応用可能であると思われます。今後は規格化ナノチタン構造を用いて、本流のオッセオインテグレーション関連因子の探索と、組織形成制御の双方から研究を進めていきたいと考えております。最後に本プロジェクトに御協力、御指導頂いております、早稲田大学水野教授、塩澤先生、桑江先生、生体組織再生工学分野の泉教授、口腔生化学分野の照沼教授、また、魚島教授をはじめとする生体歯科補綴学分野の先生方に感謝申し上げて、受賞の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

日本歯科麻酔学会最優秀発表賞（デンツプライシロナ賞）を受賞して

歯科麻酔学分野 須 田 有紀子

この度、2017年10月に長野県松本市で開催されました、第46回日本歯科麻酔学会にて「2つの多変量解析を用いた下歯槽神経拡散強調画像データの分画化」とのタイトルで口演発表を行い、日本歯科麻酔学会最優秀発表賞（デンツプライシロナ賞）を受賞しましたので、報告いたします。

本研究は、歯科医療でその損傷が問題となる三叉神経第三枝の枝である下歯槽神経をMRIで評価するための、新しい解析法の開発に関する研究です。MRIの複数ある撮像法の中から、組織の状態を画像に反映する拡散強調画像法を用い、既存の方法では得られなかった、下歯槽神経の新たな組織分画を抽出する解析法を探索しました。結果、下歯槽神経の拡散強調画像データから、下歯槽動静脈と、末梢で枝分かれして異なる領域の感覚を支配する神経小束との関連が示唆される、3つの空間分布的・組織成分的に異なる分画が抽出できました。今後、本研究の解析法は、下歯槽神経といった三叉神経において、組織の病態生理を評価しうると考えています。

MRIというのは、歯科の分野では腫瘍や顎関節の評価で使用する事が多く、そもそもレントゲンやCTと比べるとなじみの薄いものかと思います。しかし、脳の評価にMRIは一般的であり、整形外科の分野などでは末梢神経の評価にも使用さ

れています。MRIが口腔顔面領域の神経の評価に有用な手段となりえることを、皆様に感じてもらえれば嬉しい限りです。

最後に、本研究遂行にあたり、ご支援とご意見をくださりました歯科麻酔学分野の先生方、ご指導くださった新潟大学脳研究所・統合脳機能研究センターの先生方、照光真先生、瀬尾憲司教授に心より御礼申し上げます。



日本口腔インプラント学会 歯科衛生士優秀発表賞（ヒューフレディ賞）受賞報告

診療支援部歯科衛生部門 稲野辺 紫 巳

このたび、2017年9月に仙台市で開催されました第47回日本口腔インプラント学会にて歯科衛生士優秀発表賞（ヒューフレディ賞）を受賞致しましたので報告させていただきます。演題は「人工歯肉付きインプラントブリッジに対するプロフェッショナルケア後の細菌数と患者満足度の評価」です。

近年、人工歯肉付きのインプラントブリッジが増加しています。このような補綴装置は歯槽骨吸収が進んだ高齢患者の症例に適用されることも多く、患者自身のセルフケアが難しく、歯科衛生士による定期的プロフェッショナルケアが大変重要となります。プロフェッショナルケア時に上部構造を外さない場合、プラークの付着状況の確認やインプラント周囲粘膜の炎症状況の的確な把握が困難となります。しかし、プロフェッショナルケア時に上部構造を取り外す有効性についての報告はほとんど無く、上部構造を取り外して清掃するかどうかの診療指針は未だありません。そこで本研究では、スクリュー固定の人工歯肉付きインプラントブリッジの上部構造を取り外して清掃を行う方法と、外さずに清掃する方法を清掃前後の細菌数と患者満足度を評価の指標として比較しました。

その結果、上部構造を外す場合も外さない場合も清掃効果が認められましたが、外して清掃を行ったほうが細菌残存率は有意に低いことが明らかになりました。また、上部構造を外さずに清掃すると満足度が低い傾向がありました。細菌数レベルを1～7段階で評価すると、清掃前の細菌数

がレベル2以下の場合は、上部構造を外さずに清掃してもレベル1まで下がる可能性が高いが、清掃前の細菌数がレベル3以上の場合は、上部構造を外さずに清掃すると細菌が残る可能性が高いので、上部構造を外して清掃する必要があることが明らかとなりました。

スクリュー固定の人工歯肉付きインプラントブリッジはさらに増加していくと考えられます。今後、効果的なプロフェッショナルケアの構築のために、多施設研究や評価項目の増加等さらなる研究が必要だと考えています。

最後に、今回の受賞に際して、このような機会を与えてくださった魚島勝美教授、ご指導頂いた荒井良明准教授をはじめとする顎関節治療部の先生方、インプラント治療部の小川信先生、統計解析のご指導を頂いた濃野要先生、サポートして下さった歯科衛生部門の皆様はこの場をお借りして深く感謝致します。



平成29年度日本矯正歯科学会学術奨励賞受賞報告

歯科矯正学分野 坂 上 馨

このたび、第76回日本矯正歯科学会において、筆頭論文である「Tongue pressure production during swallowing in patients with mandibular prognathism.」が学術奨励賞を受賞致しましたのでご報告します。

論文内容を少し紹介させていただきます。骨格性下顎前突症患者と低位舌との関連性は高いとされ、過去に安静時における舌位の検討はされてきましたが、動的状態下での舌の動態についての報告はありませんでした。そこで本研究では、骨格性下顎前突症患者、正常咬合者をそれぞれ対象として、厚さ0.1mmの舌圧センサシートを用い、ゼリー嚥下時の舌圧を比較検討しました。その結果、個性正常咬合者では、舌尖部と切歯乳頭後方部との強い接触が嚥下動作における固定源としての役割を担っていることが、骨格性下顎前突症患者では舌の口蓋後方周縁部への押し付けが長時間に渡り必要であることが示唆されました。

私にとって海外誌に投稿する事は挑戦でした

が、今回このような形で評価され大変嬉しく思います。現在、矯正科では骨格・咬合と機能の関係についてチームで研究を行っています。今後、様々な形で成果を発表できたらと考えています。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、小野高裕教授、堀一浩准教授に心から厚く御礼申し上げます。



第76回（公社）日本矯正歯科学会学術大会優秀発表賞を受賞して

栗 原 加奈子

この度、2017年10月に札幌で開催された第76回日本矯正歯科学会学術大会にて優秀発表賞を受賞致しましたので、ご報告致します。

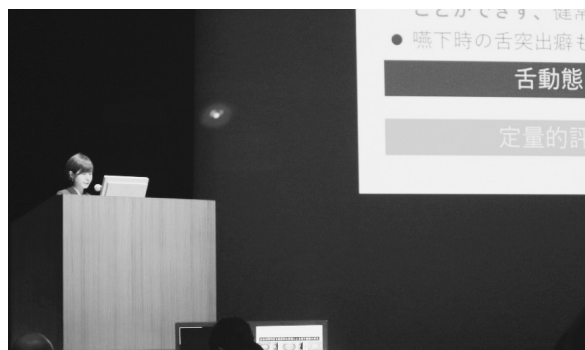
演題名は『成人前歯部開咬症の嚥下時舌突出が舌圧発現様相に与える影響』で、口演発表をさせていただきました。研究内容の概略は、前歯部開咬症は、上下顎骨や上下顎歯列弓の垂直的な異常として認められ、嚥下時に上下顎歯列による口腔前方部の閉鎖を行うことができず、健常者と異なる舌動態を呈することが推測されます。さらに嚥下時舌突出を伴う場合があり、その習癖も舌動態に影響すると考えられます。そこで、厚さ0.1mmの舌圧センサシートを用いて、前歯部開咬症の嚥下時における舌突出が舌圧発現様相に与える影響を検討しました。その結果、嚥下時舌突出を認める前歯部開咬症の舌圧は、口蓋正中中央部から後方で弱く、舌圧波形は多様性に富み、健常群と異なることが示唆されました。今後は舌圧のみならず、口唇や頬部の動きも探索し、それらの協調性を評価することで、さらに深い考察ができると考えております。

さて、札幌には7年間住んでおりましたので、10月の札幌の寒さは承知していたつもりでしたが、飛行機から降り立った途端、肌に突き刺さるような寒さに発表前の緊張がより一層高まりました。ですが

同時に、見慣れた風景に後押しされている感じもありました。発表前には、たくさんの方から激励の言葉をかけていただき、また当日も、壇上から医局員の先生をはじめ、同門の先生が聴衆席にいらっしゃるのがわかり、大変心強く発表に臨むことができました。

このような大変貴重な機会を与えてくださり、またご多忙にも関わらずご指導を賜りました齋藤 功教授、福井忠雄先生、坂上 馨先生をはじめとする歯科矯正学分野の先生、包括歯科補綴学分野の小野高裕教授、堀 一浩先生、ならびにご支援いただきました同門の先生には、心よりお礼申し上げます。

今後も日々精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



口腔生化学分野紹介

口腔生化学分野教授 照 沼 美 穂

1 はじめに

口腔生化学分野は、新潟大学歯学部口腔生化学講座として昭和41年に歯学部最初に設置された4講座（口腔解剖学第一・口腔生理学・口腔病理学・口腔生化学）のうちの1つです。初代教授に新潟大学医学部から来られた野原廣美先生、二代目教授を織田公光先生（現 新潟大学名誉教授）が務められ、平成28年8月に私が三代目教授として就任いたしました。平成30年2月現在のスタッフは4名（教授1、准教授1、特任助教2）で、准教授の天谷先生以外は全員ニューフェイスでしかも女性ということで、学内では珍しい体制となっております。まだまだ規模は小さいですが、常に新しいことにチャレンジしていこうと、教職員一丸となって取り組んでいます。4月からは新体制がスタートして初めての大学院生が2名加入することになっており、賑やかになりそうです。

2 研究について

前任の織田先生の研究グループは、骨のマーカーであるアルカリホスファターゼの研究をしていました。私が着任してからは、神経科学が専門ということで脳の神経伝達シグナリングを主体とした研究を行っています。現在行っている研究をいくつか紹介させていただきます。

「食べる」の研究

我々が食べたり飲んだりするときには、無意識に五感を使っています。「視・聴・嗅・味・触」の五つの感覚はそれぞれ独立して脳に情報を伝えていますが、脳内でそのシグナルは一体となって、満足感や幸福感などの忘れがたい記憶として脳に定着しています。しかしながら肥満や糖尿病

になると、摂食制御機構に異常をもたらし、食事の満足感や満腹感を鈍らせるだけでなく、脳のエネルギー代謝調節機構にも大きな変化をもたらし、認知症などの脳機能障害を引き起こします。飽食と言われる日本では、糖尿病人口は世界第9位の720万人であり、メタボリックシンドロームの該当者は予備軍と合わせて2000万人もいるとされています。当分野では、肥満や糖尿病、そしてアルコール性肝炎がもたらす様々な脳障害の原因の分子メカニズムの解明を目指し、神経細胞やグリア細胞などの脳細胞に焦点を当てて研究しています。

口腔がんの研究

神経伝達を担う受容体は、神経細胞に発現しているだけでなく、様々な末梢の組織やがん細胞にも発現しています。しかしながら、なぜこれらの受容体がん細胞にも発現しているのかは今のところ判っていません。当分野では、神経細胞では明らかとなっている細胞内シグナリングが口腔扁平上皮癌においても保存されていることを見出し、現在、新規治療の開発につなげようと研究を続けています。

てんかんの研究

てんかんは脳の神経細胞の過度の興奮によって痙攣や意識障害などを繰り返す疾患で、新生児から高齢者まで幅広い年齢で発症する難治性の神経疾患です。中でも妊娠中や出産時に何らかの原因で胎児の脳に血液が循環せずに低酸素状態となる低酸素性虚血性脳症（HIE、無酸素生脳症）は、新生児てんかん患者の6割以上に見られることから、その主要原因とされています。当分野では、低酸素性虚血性脳症を起因とする新生児てん

かんやその後の神経障害のメカニズムの解明を目指し、研究を行っています。

3 教育について

当分野では歯学科2年生の生化学Ⅰ・Ⅱと基礎生化学実習、3年生の口腔生化学を担当しています。生化学Ⅰ・Ⅱは、2年生が五十嵐キャンパスから旭町キャンパスに移ってきて最初に学ぶ基礎科目の1つになります。細胞生物学の基本から始まり、人体がどのような物質で構成されているか、さらにはどのような化学反応でこれらの物質が合成・分解されるかを学ぶことで、化学的・生物物理学的な考え方をもとでの生命現象の理解を目指します。また、栄養学と関連させながら、五大栄養成分が人体でどのようにして消化され、体を構成する成分へと変化していくのかについても学びます。これらの知識は、様々な疾患や生化学検査項目を理解する上で不可欠であり、医療人として今後もずっと必要になってくるものです。生化学Ⅰ・Ⅱは平成30年度より統合され、「基礎生化学」として再出発します。これまでよりもより細やかに授業を組み立てていこうと考えています。

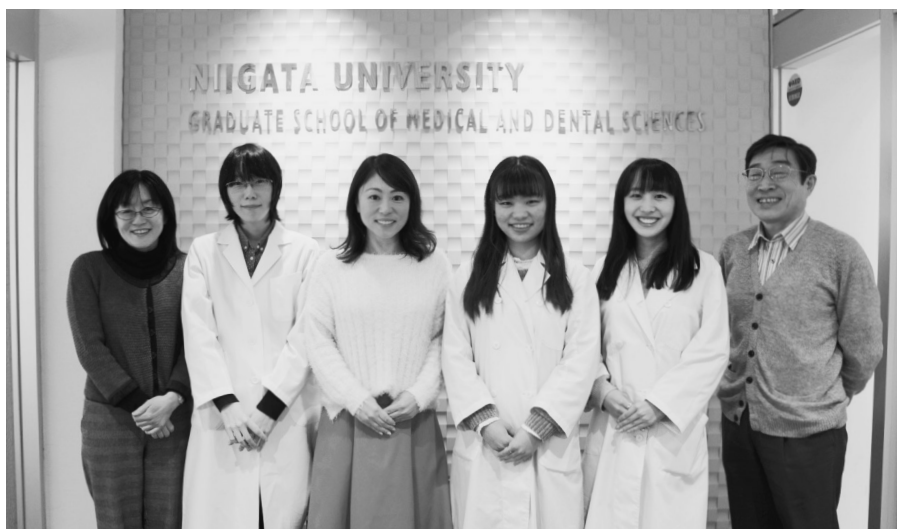
生化学Ⅰ・Ⅱと並行して行われるのが、基礎生化学実習です。遺伝子やタンパク質を実際に扱いながら、生物化学、細胞生物学の実験における基本的な実験器具や機器類の正しい取り扱い方を学

ぶとともに、データの解釈や結果の考察を通して、学生一人ひとりが課題を発見し、問題解決能力を身につけることを目指します。

3年生の口腔生化学では、臨床と関連する項目を扱っています。歯や骨、歯周組織の組織成分や、それらがどのようにして作られ破壊されていくのかを分子細胞生物学的に学ぶほか、う蝕や歯周疾患の発症メカニズム、フッ素の働き、唾液の役割などを学びます。臨床との関連性を直に感じてもらうために、臨床の先生にも少し講義に加わっていただいています。基礎科目を履修し、臨床科目も開始したところで始まる本講義は、歯科医師を目指す学生にとっては基礎生化学よりも親しみやすいようです。今後も最新の知見を紹介しながら、基礎科目が臨床を学ぶ上で大切であることを感じ取ってもらえるような授業を行いたいと考えています。

4 おわりに

平成30年の春には、これまでC棟6階にあった研究室がE棟3階に引っ越します。教員と学生が気軽に話し合いながら互いの研究を進めることを目的としたオープンラボになります。生化学や基礎医歯学研究に興味のある学生さんはいつでも大歓迎です。分野間の共同研究もいつでも相談に応じますので、気軽に遊びに来てください。



歯学部玄関にて（2年生の歯学研究演習配属の学生とともに）

包括歯科補綴学分野の紹介

小 野 高 裕

はじめに

歯学部ニュースの読者の皆さん、こんにちは。包括歯科補綴学分野（図1）を担当している小野です。よろしくお願いします。歯科関係の方でなければ、おそらく歯学部に入學して（お子さんが歯学部に入學されて）初めて聞いた「補綴」という言葉だろうと思います。しかし、かぶせ物や入れ歯（有床義歯）といった装置（補綴物）で失われた歯の一部あるいは全部を回復し、もう一度しっかり噛めるようにする「歯科補綴治療」は、昔からほとんど全ての歯医者さんがやって来しました。

日本の歯学部には、2つないし3つの歯科補綴学講座（分野）があります。これは、「歯科補綴学」という科目が、歯をかぶせるクラウンやブリッジという装置と、歯のないところに入れる義歯という装置、つまり装置の種類によって分かれて発達して来た診療技術体系であったという歴史的経緯によるものです。今も、教科書は「クラウンブリッジ補綴学」と「有床義歯補綴学」という風に、装置単位で分かれています。新潟大学歯学部の教育課程では、前者を生体歯科補綴学分野（旧二補綴）、後者をわれわれ包括歯科補綴学分野（旧一補綴）が担当しています。で、皆さんは疑問に思うかもわかりませんか、「"包括"歯科補綴学って何なの？」って。はい、よくぞ質問してくれました（してない？）、それをお答えするのが、教授である私の仕事なんですね。



図1. 包括歯科補綴学のメンバー（平成29年5月）

包括歯科補綴学とは何か

すでに皆さんは、日本が「超高齢社会（65歳以上の人口が全人口の21%以上）」に突入して久しいことはご存知ですね。高齢人口が増える傾向は今世紀の半ばまで続くと言われていますが、すでに地方によっては多くの「限界集落（人口の50%以上が高齢者になっている集落）」を抱え、自治体として機能することが困難になって来ている町村があります。これから日本の地域社会が経験する困難をどう克服していくか、世界が注視していると言えるでしょう（と開き直らないといけなくらい大変な時代になるようです）。元気な高齢者も沢山おられますが、歳とともに病気が増え、体が衰えるのは避けがたい傾向です。高齢者が増えるということは、病気を持った高齢者、体が衰えた高齢者が増えるということに他なりません。そして、そうした高齢者の多くは歯科的な問題を持っているのです。

そこで、われわれ歯科医療に関わる人間としては、これまで築いて来た医療技術やそれを支える学問体系を遵守しているだけでは、このSilver Tsunamiに飲み込まれてしまう、という危機意識を持つ必要があります。私は歯科医師になって34年になりますが、これまで大学病院で口腔がん

などの手術によって食べる・しゃべるといった口腔機能が大きく損なわれた患者さんの補綴治療を手がけて来ました。こうした口腔機能の問題は、脳卒中や神経疾患、認知症の高齢患者さんでも深刻だということを知り、摂食嚥下リハビリテーションについて勉強しました（今の学生さんたちは歯学部でちゃんと習いますが、昔はそういう科目がなかったのです）。そして、有床義歯をはじめとするさまざまな補綴装置を使うことで、患者さんのリハビリテーション（残された能力を最大限活かして、障害を軽くする）にどう役立つかをテーマに、臨床と研究を続けて来ました。

教授職となった現在、私は学生の皆さんに、超高齢社会で必要とされる歯科医師になるために、「口腔機能を診る・回復する」知識と技術を持っていただきたいと考えています。そのために、私の担当する「有床義歯補綴学」では、これまでの「装置による体系」だけではなく「病態による体系」に基づく講義・実習を行っています（図2）。そこでは、有床義歯だけではなく、さまざまな口腔内装置を駆使して、食べる・しゃべる機能が損なわれた患者さんのリハビリテーションを促進し、健康と生きがいを取り戻していただくことが目的になります。リハビリテーションは、歯科医院の中だけで完結するものではなく、医科や介護・福祉の専門職、患者さんのご家族との連携が必要になります。歯科医師として、狭い自分の領域だけを見るのではなく、広い"包括的な"視野を持つこと、それが「包括歯科補綴学」という分野名の意味するところだと私は考えています（説明、長かったですね…）。

歯科補綴学のリコンストラクションのイメージ

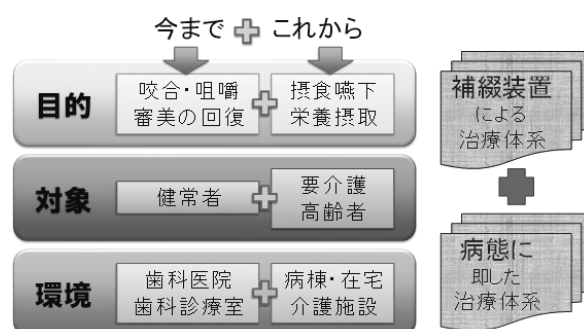


図2. 歯科補綴学のリコンストラクションのイメージ

分野の教育・臨床・研究活動

紙数が限られていますので、簡単にご紹介しておきましょう。まず教育に関しては、3年次後期の「顎口腔機能学（旧補綴学総論）」、4年次前期の「有床義歯学」と「欠損補綴学Ⅰ」、同じく後期の「欠損補綴学Ⅲ」を担当しています。3年次から4年次にかけて、まず解剖学や生理学で習った口腔機能に関する知識を思い出して、臨床に結びつける橋渡しをします。そして、有床義歯による治療の進め方について座学、実習、PBLなどで学びます。5年次のポリクリを経て、臨床実習では有床義歯症例の治療を指導します。特に重要なことは、患者さんの機能障害を客観的に把握して、一口腔単位の治療計画を立てるためのノウハウを経験し習得することです。

当分野は、医歯学総合病院で義歯診療科を開設しています。ここでは、有床義歯補綴だけでなく補綴治療全般を行っています。また、口腔がん患者さん、摂食嚥下障害患者さんへの補綴治療を、関連各科と連携して行っています。診療スタッフは教員・医員だけでなく、大学院生、レジデントも活躍しています。補綴治療のスキルを磨き、認定医や専門医を目指します（図3）。

研究については、咀嚼・嚥下機能研究を中心に、いくつかのテーマを進めていますので、詳しくは分野のホームページをご覧ください。特に、センシング技術を駆使した咀嚼・嚥下機能定量解析システムについては、①診察・治療の精密化・効

率化、②リハビリテーションの合理化・効率化、③嚥下困難者用食品の開発という3つの観点から多くの大学・研究施設や企業との共同研究を行っ

ています（図4）。「口腔機能から健康長寿を創る」ことをスローガンに、常に社会への出口を意識した継続性のある研究を心掛けています。



図3. 医局で開かれる症例検討会

咀嚼・嚥下機能定量解析システムの展開



図4. 咀嚼・嚥下機能定量解析システムの展開

おわりに

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。これを書いている現在、歯学部の前にはまだ8年ぶりの大雪の名残の雪山が溶け残り、春が待たれる心境です。私は50代半ばまで気候温暖な西日本しか知りませんでしたが、新潟の厳しい冬を越えた後の春の喜び、すがすがしい夏と実りの秋の美しさを味わうことができて本当によかった

と思います（可愛いRYUTistにも会えたし）。そして、新潟に来て初めて、超高齢社会の歯科的問題についてこれまでにない深刻さで理解することができたことも事実です。新潟大学歯学部から、一人でも多くの有為な歯科医師を送り出せるよう、教育・臨床・研究のすべての面で、ますます包括歯科補綴学分野が頑張っていかなければならないと、（一人で勝手に）気合いを入れつつファイルを閉じるとしましょう。

素

顔

拝

見



う蝕学分野 助教

大 墨 竜 也

歯学部ニュースは、「大学院へ行こう」以来となります。「素顔拝見」の依頼をいただきまして、すでにご存知の方もいらっしゃると思いますが、自己紹介を兼ねて私の人となりをお伝えできればと思います。

2年前に野村教授が着任されると同時に、2016年4月からう蝕学分野の助教を拝命いたしました。野村教授とは、バイオフィルム研究に携わることとなった大学院生時代より、学会等でお話をさせていただく機会もあり、よく存じておりましたので、ありがたい縁を感じております。

生まれも育ちも新潟市で、生粋の新潟人です。市内では新潟弁もあまりイメージがないかもしれませんが、ところによってはなかなかクセのある新潟弁が存在しており、普段は出ませんが、比較的ネイティブな方です。

小さい頃から、釣りが好きで、釣った魚を夕飯のおかずにするのもしばしばで、それが高じて料理も趣味の一つです。小学生の頃、将来の夢と題して作文を書いたのですが、その当時、将来の夢が魚の博士という、今でいう、さかなクンになりたかったのです。今考えてみると、博士になるという点では夢が叶ったわけです。

身内に歯科医がいるわけでもなく、矯正治療を経験したことから歯科に興味を持ち大学受験を考える頃には歯科医を目指すようになりました。学生時代、座学が本当に苦手で、試験になると同級生にお世話になるばかりでした。幸い実習で手を動かす方が得意で、カービングなんかも好きでした。赤塚の新入生研修の際にあみだくじで偶然決

まったクラス幹事もはじめは1年経ったら交代を、なんて話でしたが、その後気づけば6年間やんわり押し付けられた感も否めませんが、頼まれると断れない性格がよく現れていると思います。

学生時代は卓球部に所属し、5年生頃からバレー部にも少し顔を出させてもらい、部活が中心にあったように思います。もともと中学時代は、今では盛り上がりを見せていますが、当時はまだパツとしないイメージの卓球部でした。高校ではひょんなことから畑違いのバレー部に入部、高校3年間は部活に明け暮れ、きつい練習を乗り切るための体育会系の気合いとテンションを体得しました。5年生の頃、デンタルの卓球部門の主幹校として、実行委員長を務めさせていただき、周囲の助けもあって部門総合優勝を果たすことができました。さらに、普通部活も引退かという6年生の時に、当時部員の少なかったバレー部に助っ人として夕方になれば、学生技工室を飛び出すように練習に向かい、卓球、バレーのデンタルをハシゴして出場したこともいい思い出です。大変な思いもしましたが、仕事面、人との繋がりも含めて大学の部活動で得たものは大きかったと実感しています。

卒業後、研修医からお世話になったう蝕学分野に大学院生として入局しました。大学院生時代のお話は「大学院へ行こう」(平成25年度第2号)に寄稿させていただいております。苦楽を共にした大学院の同期というのはいかたがえのないもので、時折、集まっては近況を語り合っています。大学に残る仲間も少なくなっていますが、分野の違うお互いの研究も大学院時代から変わらず話すのですが、学生時代とは違うのは、教育の話題でしょうか。総診で臨床実習に携わるようになり、自分の学生時代を思い返すのですが、時は早いもので、10年近く経て、学生から自分はどんな風に見えるのだろうか、不安な気持ちになったりもします。

研究・教育・臨床の3本柱をバランス良くこなしたいところですが、現実にはなかなかそうもいっておらず、自分自身に鞭打つ日々です。末筆ながら、微力ではありますが、う蝕学分野、歯学部的发展に尽力して参りたいと考えております。今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



生体歯科補綴学分野 助教

江口香里

こんにちは。平成29年4月1日より生体歯科補綴学分野の助教を拝命いたしました、江口香里と申します。この度、素顔拝見のお話をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきますと思います。

私の出身は栃木県宇都宮市です。宇都宮というと、餃子！他には……という方もいらっしゃるかもしれませんが、一見印象が薄いかもしれませんが、栃木県はイチゴや梨の名産地であり、山や川といった自然に恵まれ、温泉やフラワーパーク、牧場、アウトレット、サーキット場といった数多くの観光地が存在する、非常に魅力的な県だと自負しております。スポーツが盛んで、野球やサッカー、バスケットボール以外にもアイスホッケー、モータースポーツ、サイクルロードレースのプロスポーツチームがあることも自慢の一つです。何より、新潟での生活が長くなった私にとって、冬でも太陽を見ることが出来る関東平野の天候は、最大の魅力に感じます。都心にも近からず遠からず、程よく都会、程よく田舎。そんな土地で高校時代までを過ごしました。

高校時代は山岳部に所属していました。「キャンプって楽しそう！」という単純な理由から入部したのですが、日ごろの活動と言えどもっぱら筋トレとランニング、雨の日には重たい荷物を背負いながらひたすら階段の上り下りと、地味に大変

な活動だったと思います。しかしながら、夏にはテントや鍋といった寝食の道具一式を皆で持ち運びながら数日間かけて長野県や山梨県の山々を縦走したり、冬山合宿では雪山に登って滑落停止訓練を経験したり、高所恐怖症ながらクライミングに挑戦したりと、非常に濃い部活動であったと思います。寝食を共にした仲間との絆は強く、有難いことに今でも良き友人となっています。

その後、大学進学のため新潟に移り住みました。大学入試当日まで一度も新潟を訪れたことは無かったのですが、恐らく当時の私は何も考えていなかったのでしょう。特に何も不安を抱かなかったように思います。以前歯学部ニュースに投稿させていただいた、自身の「入学者のことば」を読み返してみたのですが、やはり入学当初から大学生活を楽しんでいたようです。

大学ではバドミントン部に所属していました。講義や実習に追われながらも、夏のデンタルに向けてバドミントン中心の生活を送っていました。今では全くですが、当時は機敏なフットワークで華麗にプレーをしていました（…と思います）。勉学の方は可もなく不可もない、いたって普通の歯学部生でした。

学部卒業後、研修医の際に冠ブリッジ診療科でお世話になり、その後大学院生として生体歯科補綴学分野に入局し、現在に至ります。大学院に進学した理由は多々ありますが、同期生が比較的多く大学院に進学したことも私の大学院進学を後押しする一つの要因であったかと思います。やはり一つ同じ教室で6年間の学部生活を共に過ごしてきた同期の存在というものは心強く、良い同期生に恵まれてよかったなぁとつくづく感謝するばかりです。

ここまで、拙文にお付き合いくださりありがとうございました。まだまだ未熟者ではありますが、教員として、日々研鑽を積んでいきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



久保田 悠

はじめまして。2016年7月1日付で予防歯科学分野の助教を拝命しました久保田 悠（くぼた ゆう）と申します。今回、素顔紹介について原稿依頼をいただきましたので、自己紹介ならびに現在の仕事、プライベートについてざくばらんに述べていきたいと思います。

生まれは神奈川県の大磯町で、湘南地域の一部といえわかりやすいのではと思います。日本初の海水浴場が有名で、夏は多くのサーファーで賑わいます。しかし、今までサーフィンをしたことがなく、湘南ボーイには程遠いです（笑）中学・高校時代を鎌倉で過ごした後、昭和大学歯学部に入學しました。大学時代、勉強はほどほど（先生方すみません！）に部活のアメリカンフットボール（アメフト）に大半の時間を費やしていました。アメフトとは、ラグビーに似た、プロテクターを着けたゴツイ大男が走って、タックルする…スポーツというよりむしろ格闘技みたいなものです。そのため、大学6年間で体重が30キロ近く増加し、卒業時には入学式に着用していたスーツが入らなくなってしまいました。人間の体はこんなにも変わるものなのだなと驚いています。その後、昭和大学大学院（口腔衛生学教室）、勤務医、海外放浪（カンボジアでの勤務、タイでの公衆衛生課程）を経て新潟大学歯学部に入職しました。

なぜ暖かい地方から寒い新潟に来ることになったのかを振り返ってみますと、海外滞在時に当教室の小川先生に直接声を掛けていただいたことと、私の苗字と国家試験の受験番号（1000番）が新潟で有名なお酒「久保田千寿」に迎えられたのかな…と新潟に対して何かと縁を感じます。

そして、肝心な仕事ですが、臨床、WHO Collaborating Centre、学生教育、研究と多岐

にわたります。私は、WHO関連の仕事、カンボジアでの小児う蝕予防の研究等で海外出張が多く医局の先生には迷惑をかけている分、しっかりと成果を出せるようにしなければと思います。また、新潟大学歯学部は国際交流が盛んで、海外からの先生、留学生が多く在籍しており、帰国後も海外との繋がりがあります。そのため、いつか彼らと一緒に仕事ができればと思います。

新潟で生活し始めて1年半ほど経ちました。新潟は、おいしい食べ物はもちろんのこと、音楽・スポーツが年中楽しめるのが魅力的です。ジャズストリート、ジャズ喫茶やリューとぴあでのライブコンサート、大学近くの白山競技場での運動は心と体の気分転換に最高の環境ですが、風が強いのが唯一の難点です。その一方で、おいしい食べ物のせいか、1年半で体重が5キロ近く増えてしまいました…（大学時代は、体重が増えると非常に嬉しかったのですが…アメフト部あるあるですね。）そのため、健康増進を目標に、週1回のランニング、ジム通いを行い、マラソンレースの参加も目論んでいます。

以上、長々と書いてしまいましたが、今までいただいた人との縁、つながりを大切に新潟大学歯学部で貢献していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



カンボジアにて：一番左端が私です

学 会 報 告

平成29年度 新潟歯学会例会報告

平成29年度新潟歯学会集会幹事 船 山 昭 典
組織再建口腔外科学分野

平成29年度歯学会例会の報告をさせていただきます。平成29年度第1回例会は7月1日（土）に歯学部講堂で開催致しました。12題の一般口演と、教授就任講演として、新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生化学分野教授 照沼 美穂先生に「脳の研究からみえてきたこと」と題するご講演をしていただきました。

平成29年11月11日（土）には平成29年度新潟歯学会第2回例会を歯学部講堂で開催致しました。15題の一般口演をおこないました。第2回例会の抄録の登録で文字制限が100文字少なく制限されてしまっており、ご迷惑をおかけした事をお詫び申し上げます。

総会、第1回例会、第2回例会において、お忙しい中、座長をしていただいた先生方をはじめ演者の方々や参加して下さった会員の皆様のご協力により、平成29年度の新潟歯学会をおおきなトラブルなく終了できましたことを、この場をお借りして、皆様に厚く御礼申し上げます。

平成28、29年度と2年間、歯学会集会係を当科が担当させていただきました。平成30、31年度の歯学会集会係は顎顔面外科学分野が担当となります。第51回新潟歯学会総会は4月15日（土）に開催予定です。新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください。



写真1：教授就任講演 照沼 美穂 先生



写真2：教授就任講演座長 前田 健康先生

同窓会だより

1. 同窓会における慶事

副会長 野 内 昭 宏

同窓会では慶事があった場合の内規を決めており、それに基づいて表彰等を行っております。今年

度は以下の4名の同窓生が教授に就任されました。それぞれ同窓会より祝意を申し上げます。

遠藤豊 先生（歯学科13期）国際医療福祉大学

配島弘之 先生（歯学科19期）松本歯科大学

入江太郎 先生（歯学科22期）岩手医科大学

照光真 先生（歯学科31期）北海道医療大学



入江太郎 先生（歯学科22期）岩手医科大学



照光真 先生（歯学科31期）北海道医療大学

2. 支部長会議

およそ2,500人いる同窓会員は、約1/3が新潟県内で、約1/3が東京を中心とする上越新幹線沿線沿いで、残り1/3が全国各地で活躍しています。特に新潟から離れている方にとっては、各支部との結びつきが強いかと思います。

同窓会では、各支部間や本部との情報交換や連携の強化を目的として、原則3年ごとに支部長会議を開催しています。本年度は開催の巡りに当たりましたので、お盆明け直後の8月20日に東京で開催しました。

本部の事業執行状況や各支部の現状等の報告、それを基にした討論が活発に行われました。各支部とも独自の事業を行い、その地区毎の情報網を持っています。ある支部では、別の支部と連携して事業を行っていることが、又ある支部では、他大学歯学部同窓会の支部と連携して事業を行っていることが、報告されました。

また同様に、口腔生命福祉学科卒業生や、最近卒業したばかりの若い方々を如何にして支部活動に参加してもらうかなどの意見交換も行われました。

会議終了後は、場所を移動して懇親会を開催し、更なる情報交換をしました。

3. 平成29年度 新潟大学歯学部 同窓会学術セミナーII

歯学科26期生 碓 井 由紀子

歯の移植を成功に導くために―適応症から予後予測まで―を拝聴して

2017年10月1日、新潟大学歯学部同窓会主催のセミナーに参加しました。講師は長年新潟大学口腔再建外科（旧第一口腔外科）で臨床・研究・教育に携わってこられ、2016年4月より松本歯科大学歯学部口腔顎顔面外科学講座の教授に就任された芳澤亨子先生で、内容は歯の移植に関するものでした。

歴史好きな先生ですので、歯の移植の歴史からお話がはじまりました。古代エジプトでは他家移植が行われており、時代を経て自家移植へと変遷し、日本においては1980年代より根完成歯移植の報告がなされてきたそうです。

新潟大学歯学部附属病院では2000年に歯の移植外来が開設されました。歯の移植治療を受けた患者さんのデータを集め、成人の歯根完成歯移植についてその成否を決める要因を前向き研究なさいました。歯の移植外来開設以前の症例については

後ろ向き研究を行いその成否に関わる因子も調べられました。

また、移植歯の成否に関わる因子の解明だけでなく、移植後に歯根吸収を生じた経過不良例について予後を左右する因子の解明もなされ、歯根完成歯移植後の経過不良例の原因・予防策・対応策について詳細に教えていただきました。

歯の移植治療を受けた患者さんの全身状態、移植歯の状態、受容部の状態を歯列模型やX線写真も合わせて術前・術中・術後とデータを取り、その膨大なデータをまとめるという地道で根気のいる作業をしつこく、もとい、丹念に続けてこられたのは、偏に患者さんの移植歯をできるだけ長期に機能させたい、という強い思いからなのだなあと感銘を受けました。移植歯が脱落してもそれは仕方のいいのではないかと、という私の考えを見直させられるいい機会になりました。

今後は歯の移植の適応であるかどうかを簡便に調べられるようなスマートフォンのアプリを開発してみたい、とおっしゃられ、患者さん第一に研究結果を還元したいという姿勢が窺われました。芳澤先生の益々のご発展をお祈りいたします。

最後に、貴重なご講演をいただきました芳澤先生、企画・運営にご尽力された同窓会の先生方に感謝申し上げて、ご報告とさせていただきます。



4. はぴすまカフェ

歯学科42期 松 田 由 実

今回で講演された根本康子先生とは、昨年度まで本学医歯学総合研究科大学院、歯周診断再建学分野の同期という関係でした。社会人大学院生として、ご自身のクリニックでの診療の合間を縫って研究をされる様子を間近で拝見し、そのバイタリティ溢れる姿にいつも感銘を受けていました。今回、そんな根本先生の「歯科医師人生を変えたターニングポイント」をお聴きできるということで、初めてはぴすまカフェ講演会に参加させていただきました。

講演では、いくつかのターニングポイントにおいて、根本先生が何を考え、どのような選択をして今に至るのか、当時の時代背景や同じ状況にある女性歯科医師に対するアンケート調査なども交えてお話しいただきました。なかでも、迷った時は「ヤバい方、ロックな方」を選んできたというお話が印象的で、同じ女性としてかっこいいと感じました。アンケート結果からは、仕事と家庭の両立や仕事復帰のタイミングなどの女性特有の悩みがある一方で、女性であることの強みや社会的なニーズを多くの先生方が実感していることを知り、今後の歯科医師人生に希望を持つことができました。講演会の最後には根本先生がクリニック

で行った症例を見せていただきました。普段の医局での症例報告では見ることができない内容が新鮮で、とても勉強になりました。

最後になりましたが、このような貴重なお話を聴く機会を作ってくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	29. 8. 31	葛 城 梨江香		口腔生化学分野 研究支援者（科研費研究員）
採用	29. 9. 7	小 川 友里奈	口腔生命福祉学科 助教	
退職	29. 9. 30	古 志 奈緒美		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手
任期満了	29. 9. 30	深 井 真 澄	医歯学総合病院 医員	顎顔面口腔外科学分野 教務補佐員
任期満了	29. 9. 30	佐 藤 知弥子	医歯学総合病院 医員	歯科矯正学分野 教務補佐員
採用	29. 10. 1	北 見 恩 美	歯科薬理学分野 産学官連携研究員	
採用	29. 10. 1	大 竹 正 紀	歯科矯正学分野 助教	医歯学総合病院 医員
採用	29. 10. 1	井 田 貴 子	生体歯科補綴学分野 特任助教	医歯学総合病院 医員
採用	29. 12. 1	枝 並 直 樹	う蝕学分野 助教	医歯学総合病院 医員
退職	29. 12. 31	LISDRIANTO HANINDRIYO		予防歯科学分野 助教
退職	29. 12. 31	原 田 史 子		高度口腔機能教育研究センター 特任助教
退職	29. 12. 31	岸 川 咲 吏	超域学術院 特任助教	口腔生化学分野 特任助教
採用	30. 1. 1	MOCHAMAD FAHLEVI RIZAL	予防歯科学分野 助教	
採用	30. 1. 1	原 田 史 子	口腔生化学分野 特任助教	
採用	30. 2. 1	田 沼 順 一	口腔病理学分野 教授	朝日大学歯学部 教授
採用	30. 2. 1	岸 本 直 隆	歯科麻酔学分野 准教授	マギル大学歯学部 客員教授
定年退職	30. 3. 31	宮 崎 秀 夫		予防歯科学分野 教授
定年退職	30. 3. 31	吉 江 弘 正		歯周診断・再建学分野 教授

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
定年退職	30. 3. 31	森 田 修 一		歯科矯正学分野 准教授
定年退職	30. 3. 31	八 木 稔		口腔生命福祉学科 准教授
退職	30. 3. 31	福 島 正 義		口腔生命福祉学科 教授
退職	30. 3. 31	中 島 貴 子		歯学教育研究開発学分野 講師
退職	30. 3. 31	多 田 紗弥夏		予防歯科学分野 助教
退職	30. 3. 31	加 藤 寛 子		高度口腔機能教育研究センター 助教
任期満了	30. 3. 31	村 上 望		小児歯科学分野 特任助教
任期満了	30. 3. 31	井 田 貴 子		生体歯科補綴学分野 特任助教
任期満了	30. 3. 31	原 田 史 子		口腔生化学分野 特任助教
任期満了	30. 3. 31	早 川 菊 枝		摂食嚥下リハビリテーション学分野 産学官連携技術者
任期満了	30. 3. 31	田 中 みか子		硬組織形態学分野 研究支援者

【事務等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
配置換	29. 10. 1	林 尚 人	医歯学系歯学部事務室 総務係	医歯学系総務課 会計係
配置換	29. 10. 1	石 栗 慎 也	学務部学生支援課 総務企画係	医歯学系歯学部事務室 総務係
退職	30. 2. 28	井野瀬 三良子		組織再建口腔外科学分野 事務補佐員
採用	30. 3. 1	小 杉 香 澄		組織再建口腔外科学分野 事務補佐員

編集後記

この度、歯学部ニュースの編集委員を務めさせていただきました。先生方にはお忙しいところ、また、6年生には歯科医師国家試験終了直後の大変お疲れなところ、さらに、4年生には後期試験で四苦八苦している中、無理を申しご寄稿いただき誠にありがとうございました。かく言う私は、原稿依頼後、毎日毎日メールをチェックし、一日千秋の思いで原稿をお待ちしておりました。今回、歯学部ニュースの編集委員を経験し、つくづく編集者には向いていないのではと思いました。最後に、執筆をお引き受けいただきました先生方、関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

生体歯科補綴学分野 青柳 裕仁

この度「SCRП参加報告」「短期留学（SV）を経験して」「早期臨床実習を終えて」「医歯学祭を終えて」を担当し、主に学生さんへの執筆依頼をさせていただきました。メールでのやり取りや原稿の確認を行う中で、学生の皆さんが様々な経験を自分の将来の糧にし、さらにはそれを社会へ還元したいという気持ちを持っていることが伝わってきて、とても感動しました。この歯学部ニュースがその一助となり、皆様の交流が深まれば幸いです。

歯学教育研究開発学分野 塩見 晶

はじめに、この度は大変お忙しい中、原稿執筆にご協力いただきました先生方、学生さんに心より感謝申し上げます。今回、初めて歯学部ニュースの作成に関わる仕事をさせていただき、先生方の活躍、学生の皆さんの今について改めて知ることができるよい機会となりました。今後とも、歯学部ニュースが歯学部の今を伝える重要な媒体として皆さんの役に立って欲しいと思います。

福祉学分野 米澤 大輔

普段読み慣れている歯学部ニュースを初めて編集の立場から担当させていただき貴重な経験となりました。学部内に学生さん、教員を含めこれほどの人材が揃っていることに改めて気付かされました。原稿を依頼した学生さん、先生方、お忙しい中執筆を誠にありがとうございました。特に素顔拝見では、学部内でひっぱりだこの教員の先生に依頼させていただいたので、著者の先生は時間を見つけるのが大変だったのではないかと思います。改めて御礼申し上げます。

高度口腔機能教育センター 前川 知樹

今回歯学部ニュース132号の編集を取りまとめさせていただきました。遅れが出たものの編集委員の皆さんが手際よく仕事をこなしていただいて何とか編集を進めることができました。お忙しいなか原稿の執筆にご協力いただきました皆様にも感謝申し上げます。原稿に目を通しつつ、“新潟大学歯学部”に所属する多くの方々の実に多様な活動が歯学部という組織を生き生きとさせている”ということに改めて感銘を受けた次第です。

顎顔面口腔外科学分野 永田 昌毅

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮 影 地：新潟市（新潟大学歯学部）

撮 影 日：2018年 4 月

使用機材：OLYMPUS E-M 5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F14／絞り優先AE（露出補正：+ 1 EV）

裏表紙の撮影データ

撮 影 地：新潟市（新潟大学歯学部）

撮 影 日：2018年 3 月

使用機材：OLYMPUS E-M 5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F5.6／絞り優先AE（露出補正：－ 1 EV）

コメント：今回は表紙・裏表紙ともに高倍率標準ズーム（35mm版換算で24～200mm相当）を使って撮影しました（本誌中の挿入写真も同様です）。表紙は広角端、裏表紙は望遠端を利用しています。デジタルカメラの自動露出は多分割測光が基本となり、撮像素子のダイナミックレンジも拡大して露出を気にしなければならない状況は少なくなっていますが、イメージに合った明るさの写真にするには、カメラの露出計が反射率18%を適正露出の基準としていることを念頭に置いて、個々の機材のクセを理解して臨機応変に露出補正を行う必要がある場合が多いように思います。表紙では明るめにするために+ 1 EV（Exposure Value）の、裏表紙では暗めにするために－ 1 EVの露出補正を撮影時に行っています。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS E-M 5 Mark II

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO

撮 影 者：林 孝文

歯学部ニュース

平成29年度第 2 号（通算132号）

発 行 日 平成30年 4 月20日

発 行 者 新潟大学歯学部広報委員会

編集責任者 永田 昌毅、魚島 勝美

編 集 委 員 青柳 裕仁、塩見 晶
米澤 大輔、前川 知樹

印 刷 所 (株)ウィザップ



リサイクル適性 
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。